

# 北部九州の弥生時代集落と社会

Yayoi Period Settlements and Society in Northern Kyushu

小澤佳憲

OZAWA Yoshinori

はじめに

①弥生時代社会構造研究の軌跡

②北部九州における弥生時代集落の展開

③弥生時代社会の集団関係

おわりに

## 【論文要旨】

これまでの弥生時代社会構造論は、渡部義通に始まるマルクス主義社会発展段階論の日本古代史学界的解釈に大きく規定されてきた。これに対し、新進化主義的社会発展段階論を基礎に新たな弥生時代社会構造論を導入することが本稿の目的である。

北部九州における集落動態を検討すると、前期末～中期初頭、中期末～後期初頭、後期中葉に大きな画期が認められる。この画期の前後における社会構造を比較した結果、弥生時代前期には入れ替わり立ち替わり現れる環濠集落を集団結節点とした平等的な部族社会が形成されていた。これに対し、弥生時代中期には丘陵上に一斉に進出した集落同士が前期的な集団関係をベースとして新たな集団関係を構築し、区画墓・大型列状墓・大型建物などの場において行う祖先祭祀をその強化手段として新たに導入した。これらは不動産であったことから、前期とは異なり拠点集落が固定化され、その結果潜在的な優位集団が成長することとなった。中期末～後期初頭の画期は、中期における潜在的な優位性が表面に表れる画期であり、それに伴い、集住現象と、集落内に潜在していた分子集団の顕在化、そして集団の各位相においてその境界を明瞭化する動きが現れる。これは、優位集団の存在が社会的に顕在化したことに伴う自集団の範囲の明確化と集団の大型化の動きと理解できる。その後、集団間の優劣関係が明瞭化したこととともない劣位集団が優位集団の系列下に取り込まれる動きが後期を通じて進行するのである。

以上の社会構造の変遷をふまえると、弥生時代前～中期を部族社会、後期を首長制社会として位置づけることができよう。

【キーワード】 マルクス主義社会発展段階論、新進化主義社会発展段階論、単位集団論、居住集団、区画集／村落、区画分子、階層化、系列化

## はじめに

北部九州における弥生時代集団論については、これまで集落域・墓域の双方を対象として積み重ねられてきた幾多の研究がある。筆者はそのうち集落域を対象とした研究史について大まかなまとめを行うなかで、これらがいかに戦前の日本古代史学界に導入されたマルクス主義的社会発展段階論の影響を受けてきたかを述べようとしたことがある[小澤 2008]。

しかし、日本史学界における先行研究が北部九州の考古学者に取り入れられるまでには、もう一つの過程が存在したこともまた事実である。本稿ではまず、第1節において北部九州の弥生集団論者に大きな影響を与えた日本古代史学界の一連の議論と、それらを日本考古学会に導入しようと試みた幾人かの代表的な研究者による業績を概観し、現在の弥生社会集団論における理論構造がどのように成立したのかをみていき、そこに共通して存在する問題点をあぶり出していくこととしたい。なお、北部九州における弥生社会集団論の展開については本稿で詳述する紙幅がない。上記の拙文を参考とされたい。

第2節では、あぶり出された問題点をもとに、いわゆる「単位集団論」の盲目的な適用を避けながら、北部九州の集落遺跡を対象として集落構造の分析を行っていくこととしたい。筆者はこれまで北部九州地域の弥生時代集落を対象として主に集落動態委の検討を通して弥生時代社会構造の発展過程に関する研究を行ってきた。本稿ではその成果に従いつつ、弥生時代を集落動態の画期に従って前・中・後期の3段階に分け、各段階における集団関係を集落資料を材料としながら検討したい。また、第3節では前節で把握された集団関係が社会人類学においてどのように位置づけられるかを、新進化論の立場から見たい。

## ①……………弥生時代社会構造研究の軌跡

### (1)「教程グループ」とマルクス主義的社会発展段階論

弥生社会構造論に取り組んだ初期の研究者としていわゆる「教程グループ」があげられる。<sup>(1)</sup>彼らが執筆した「日本歴史教程」[渡部ほか 1936]においては、原始・古代の執筆を渡部義通・早川二郎らが主導し、考古学者として唯一グループに参加した三沢章(和島誠一)は、主に渡部らにより描かれた縄文時代～古代における社会発展の道筋を考古学から跡付ける作業を担った。

「教程」グループは、マルクス主義社会発展段階論を日本の原始古代社会に当てはめることを執筆の目的としていた。教程グループの主張を略述すると次のようになる。まず、縄文時代～弥生時代への移行に伴い母系制氏族社会から父系制氏族社会への転換が起こり、これに伴って財産継承制度が変化して私有財産制が出現した。これと稲作農耕の導入に伴う生産力の発展は、氏族社会内部に富の偏在という形の矛盾を生み出すとともに地域氏族間の抗争を引き起こした。そして、この抗争を通じて弥生時代後期～古墳時代には地域集団間に「貢納制」<sup>(2)</sup>が成立した。

この中で示された重要な考え方の一つに、生産力の発展と私有財産の蓄積の過程があげられる。

渡部は、私有財産蓄積の単位として「屋族(ヤカラ)」概念を提唱した[渡部 1936]。渡部によると、屋族とは数個の家族からなる氏族内の血縁的近縁集団であるという。渡部は、これが弥生時代において土地の分割労働を通じて生産・経営の主体的単位となったとし、その性格は世帯共同体であつてのちの家父長制家族の母胎となったと理解した。戦後、和島は渡部の屋族概念を受けて氏族共同体内部の小分岐集団の存在の歴史的な位置づけを考古資料より整理した論考を示す[和島 1948]。この中で和島は、弥生時代について福岡市比恵遺跡における鏡山猛の「環溝集落」[鏡山 1941]の成果を引きつつ「一単位として集落の内部に分岐する」小集団の析出を考古資料上で指摘し、弥生時代における「世帯共同体」成立という渡部の主張を跡付けた。これらは後に、近藤義郎「単位集団論」へと結実する(後述)。

一方、もう一つの教程グループの主張を特色づける概念として貢納制がある。これについては、渡部らは階級社会の成立を古代国家の成立にみており弥生時代を無階級社会とすることは既定の事実であったため、史書に描かれるような弥生時代の地域集団間の抗争と系列化の過程については、あくまで地域集団間に成立した関係であつて、これは社会を規定する本質的な生産関係ではない(=階級社会ではない)と主張せざるを得なかった。しかしながら、その後マルクスの未発表原稿(「資本制生産に先行する諸形態」)が岡本らにより日本史学会に発表されると[岡本 1947]、「総体的奴隷制」社会が階級社会としての奴隷制社会の一形態と理解する考えが主流となり、弥生末～古墳初頭の集団関係について、特にその貢納制の部分に階級社会段階ととらえ直し、邪馬台国時代を国家(あるいは階級社会)とする見解が藤間生大により示された[藤間 1946・1951<sup>(3)</sup>]。そもそも渡部らが主張した「貢納制」は、弥生時代の集団関係において世帯共同体の成立や農業共同体の形成を想定し、土地の私有や私有財産の成立、矛盾の出現などを述べながら、これを彼らの前提に従い無階級社会に押し込めるために編み出した、奇策とも言える構想であつた。藤間の論は、「諸形態」を受けてこれをより理解しやすい形へと修正したもので、その基本構造は近藤(旧)「単位集団論」や高倉「家族集団論」を経て寺沢薫氏らに継承され、現在の弥生社会構造論のうち社会発展段階を高く見積もる見解の主流を形成していった。

## (2) 近藤義郎と「単位集団」論

渡部の「屋族」概念とそれを考古学的に跡付けようとした和島の整理を受け、近藤は 1959 年に「単位集団と共同体」を示した[近藤 1959]。ここにおいて近藤は、住居数棟と倉庫などの共有施設からなる小単位を考古学的に示し、これが弥生社会集団の基礎的な構成単位＝「単位集団」とするとともに、これらが水稻農耕における協業を軸として複数集合し、あるときは大集落を、またあるときは小地域社会を形成するとし、これを「集合体」と呼んだ。いわゆる「単位集団論」である。

近藤は、この「単位集団論」を、渡部・藤間らの理解に従いつつマルクス主義社会論的見地から肉付けする。まず、「単位集団」は生産の単位であつて大家族的な親族集団＝世帯共同体であつたとし、一方「共同体」は単位集団同士が開発と治水を通して地域的統一集団を形成したもので、「農業共同体」であるとし、これらは遅くとも中期までには出現する<sup>(4)</sup>とした。そして、弥生中期を通じて用水権や土地開発権などを巡っての争いを通して農業共同体間相互の系列化が進行し、弥生後期には個々の地域的統一集団にとっての直接的な外延の条件が失われて系列内における矛盾が顕在化

し、古墳時代にいたって支配－被支配関係へと変質すると理解した[近藤 1962]。

近藤の理解は、渡部・和島の社会論を基礎としつつ、階級社会の成立に関しては藤間の立場に従って、考古資料をマルクス主義的観点から解釈したものと位置づけられるが、問題点として「共同体」概念の幅広さがあった。農業共同体間相互の系列化が進行する前の個々の共同体と、系列化が進行した後の共同体群全体が、ともに農業共同体という用語で示されるのである。このため、社会構造の把握に置いてはやや曖昧な点があった。これに対し、高倉洋彰は鏡山の集団論[鏡山 1956・1957・1959]をふまえてこの問題点を整理し、平野単位<sup>(5)</sup>の統合を地域的統一集団、その内部における集落群を地域集団として、近藤「共同体」概念を昇華させた[高倉 1973]。その上で、藤間に従いつつ、弥生時代前期には単独の血縁集団から集落が構成されていたが、水稻農耕における協業などを通じてこれらが地縁的に結合して地域集団を形成し、さらに水利権の調整を巡って近隣の地域集団同士が結合して地域的統一集団が形成されたとした[高倉 1975]。このような、単位(家族)集団－共同体(地域集団)－地域的統一集団という階層的な集団関係の把握は、下條信行・寺沢薫らに共通する枠組みであり、現在の弥生社会構造理解の主流となっている<sup>(6)</sup>。

一方、近藤は1972年以降、おそらく日本古代史学界において原秀三郎・石母田正らにより国家の成立を古代に求める見解が次々と提出されたのに影響を受け、それまでの立場を大きく変えた論考を提出するようになる[岩永 1991・1992]。この立場を体系的に著述したのが「前方後円墳の時代」[近藤 1983]である。ここで近藤は、それまで専制国家の成立を藤間に従い古墳時代前期に見ていたのを、大きく下げて8世紀の律令国家の成立に求めるという変更を行った。この結果、古墳時代より前については氏族共同体社会であるという立場を取ることであり、それまで国家成立直前とみていた弥生社会の理解をも大きく変更することとなった。まず、「農業共同体」としていた「集合体」<sup>(8)</sup>について、「氏族的共同体」と変更した。これは氏族共同体から家父長制社会への移行過程に生じるものとされる「農業共同体」が、無階級社会のまっただ中にある弥生時代においては相容れない概念となったことを受けての変更であり、同じ理由から「世帯共同体」についても、家父長制家族の母胎となる近縁小集団から、氏族的共同体を構成する家族体と変更した。結果、単位集団(家族体)－集合体(氏族共同体)－地域的統一集団(部族)という構造を措定した。以上の条件を前提として、近藤による「新」単位集団論が提示された。その概要は次の通りである。

まず、単位集団は大規模労働に際して氏族(集合体)の枠組みに依存し、その自立度は低い。従って単位集団間の矛盾は大きな問題ではなく、むしろ単位集団(＝氏族分節)の自立への欲求と対立する氏族共同体規制との間の矛盾が重要で、これを抑え込むため共同体首長権が強化される<sup>(10)</sup>。また、氏族は(急速な集団分岐により形成された)血縁的同族関係により結びついて部族を構成し、部族長は他部族との利害調整機能を背景に首長権を強化する。しかし、いずれの首長権も、背景には血縁的な同祖同族関係からなる共同体規制が働くために突出せず、氏族間・部族間の関係は基本的に平等なものであり、弥生時代は無階級社会であったと定義した。これにより、学界は近藤「旧」・「新」単位集団論の並立の様相を呈し、大きな対立を抱えることとなった。

### (3) 都出比呂志氏と小経営体論

こうした中、都出比呂志は近藤「旧」単位集団論を下敷きにしつつ新たな議論を立ち上げる。都



出は高倉の整理より前の1970年に近藤「旧」単位集団論における集団概念の曖昧さを整理しつつ日本原始・古代社会における集団関係の発展をマルクス主義社会論により述べている。これによると、縄文時代の集団関係は相互に血縁関係により結びついた複数の世帯からなる小集団(独自の領域を持つ)が社会の基礎的単位であり、これが協業の必要性に応じて集合離散していたといい、この集合を部族とする。弥生時代になるとこの小集団が土地の所有や経営の基礎的単位として機能するようになったとし、これが「単位集団」の実態であって「世帯共同体」であると述べる<sup>(11)</sup>。そして、弥生時代当初はこれらが分村を軸とした血縁関係により相互に結びついていたが、次第に水利や鉄器入手などを通じて再編成され、「土地と水利を基軸とする地縁的編成として」の「農業共同体」が形成されたとする。

世帯共同体間にはすでに中期には富の偏在が生じており、優位な世帯共同体家長は「家長会議」の主宰者として、各世帯共同体間の利害の調整機能を担い、農業共同体首長としての権力を強めると同時に、その世襲制の傾向を持つようになる。また、農業共同体間においても、土地と水利を巡っての争いの結果優位な共同体による他の共同体の従属化が進行し、さらに大きな政治的結合体が形成される。結果として共同体首長は突出するが、これは世帯共同体への共同体規制を体现するものとして現れるため、世帯共同体間の不均等は成長しない。従って、3～5世紀の階級関係は「結合体」首長と、広範な共同体成員との間で形成された」とものと理解するのである[都出1970]。

さらに都出は、同様の集団が5世紀代の集落に認められるとし[都出1984]、旧石器時代から古墳時代中期まで、都出氏が「小経営体」と述べるような数棟の住居群に居住する小血縁集団が一貫して社会の基礎的単位となる主張する。これが、都出の「小経営体論」である[都出1989]。

都出「小経営体論」は、日本考古学において初めてマルクス主義社会論に代わる新たな社会理論の枠組みを提示しようとした画期的な試みであったといえよう。しかし、みてきたようにそのベースはあくまで(日本的)マルクス主義社会理論にあり、その欠点も引き継いでいる。以下に、これまでの研究史における問題点をみていくこととする。

#### (4) 弥生社会構造論研究史の問題

みてきたように、現在までの弥生社会構造論は戦前のマルクス主義社会発展段階論の日本古代史への導入が基礎となって形作られてきた。このため、基本的な問題点は共通している。

まず弥生時代前期の集団関係について見たい。渡部は弥生初期の集団関係について、領域を有する氏族共同体から土地の分割所有単位として近親血縁集団である「屋族」が分節していき、世帯共同体へと発展するとし、和島もこの理解を踏襲した。藤間も基本的にはこの理解に従いつつ、縄文晩期の基礎構成集団を、ひとつの「部落」または「ムラ」を構成し、その内部に複数の世帯を含み、相互に血縁の関係によって結ばれた「氏族=地域小集団」とし、またそこから分節する集団を親族共同体と呼んだ<sup>(12)</sup>。近藤は、この「屋族」(=世帯共同体)を考古学的な証拠より立ち上げ、単位集団と命名した。都出は、これを縄文時代にまで敷衍し、「小経営体論」の基礎とした。

これらの理解において赤松啓介が果たした役割は重要である[赤松1937]。赤松は、一つの河川流域(溪谷)に形成された集落には、他よりも密な交換関係を通じて親縁関係が形成されており、これらは互いに血の紐帯によって結ばれている意識を持ち氏族を形成していたと考えた(「溪谷式聚落」

<sup>(13)</sup>論)。渡部・和島・藤間・近藤らの「氏族」概念は、いずれも氏族が排他的に一定の地域内に居住しており、氏族が土地の領有単位となっていることから、赤松の「溪谷式集落」を前提としていると理解できる。

ここで問題にすべきは、「溪谷式集落」概念には氏族が土地の領有単位と考えられている点である。赤松により最初に示されたこの考えには、次のような暗黙の仮説が含まれている。①初期の集団の進出は無人の地への入植である(先住者の存在を無視)、②分村運動は近隣にのみ行われる、③分村運動は地域的に排他的に行われる(当初より氏族分節の分出する範囲が決まっている)。

以上のうち①・②については、先住の縄文(在来)集団や他地域からの弥生集団の流入を考慮する必要がない(と考えられていた)北部九州においてこそ成り立つ余地があったものの、他地域においては成立しがたいことは明らかである。また弥生集団が渡来・在来集団双方の混合により成立し、かつ渡来が波状的に行われたという最近の研究成果を鑑みれば、北部九州でも成り立つ余地はなくなったといえよう。③については文化人類学側の近年の理解と大きな齟齬があり、特に新進化主義社会発展段階論を提示したE.サーヴィスが部族社会における氏族についてソダリティ<sup>(14)</sup>概念を導入して「地域横断型」クランという位置づけを明確に示した[サーヴィス 1971]ことをふまえて、縄文時代晩期(～弥生時代初期)を部族社会段階と評価する前提に立てば、見直しが必要であることは明確といえよう。

なお、近藤らは、前期には近隣集落同士が血縁的紐帯により結びついていたと主張する一方、中期になると農業における協業などを軸としてやはり近隣集団同士が今度は地縁的に結合すると主張する。しかしこれは、前期と中期のいずれも近隣集落同士が結合している状況に変化はなく、その紐帯の性質が血縁から地縁へと変化したと言っていることになる。実態としての結合は同じであるのに紐帯の性質が変化したというならば、それなりの根拠を示す必要があるが、いまだ解決されていない。これはそもそも、前期に地域盤踞型氏族を想定したことにより生じている問題点である<sup>(15)</sup>う。

一方、都出は縄文時代晩期の集団関係を、血縁紐帯によりまとまった小集団が相互に近隣関係により集合離散していたと理解し、高倉は前期には集落間に集団関係はないと主張した。これらは、前期から中期にかけて集団結合の実態(結合する相手)は変わっていないのに、その紐帯が血縁から地縁へと変化しているという疑問に対する一つの回答ではある。しかしこの主張は、前期社会における集団紐帯として集落内における血縁的家族による紐帯以上のものを想定しない＝「バンド社会」を意味し、縄文社会集団研究の成果との齟齬が大きいことから、やはり成り立つことは難しいと考えざるを得ない。

次に弥生時代後期の集団関係について見たい。高倉は弥生後期末には家族集団が解体して首長が家族を直接支配するようになるというが、これは世帯共同体が古墳時代初頭までに解体して(住居1棟ごとが直接支配されることから、おそらく家父長制家族ではなく)個別家族が社会の基礎単位となっているということを意味する。律令期前後までに家父長制家族が成立すると理解してきた古墳時代・古代における社会集団論との齟齬が非常に大きく問題である。

一方、近藤(新)「単位集団論」と都出「小経営体論」では単位集団(＝氏族分節、あるいは世帯共同体)間の格差は氏族あるいは農業共同体首長に体现される共同体規制により阻害され発展しないと理解

しつつ、結論としての弥生時代後期の弥生社会の階層化の状況については大きく異なった姿を主張する。しかし北部九州地域における集団研究はこれと大きく異なった理解が主流であり、例えば下條信行は後期を通じての単位集団の序列化の進行過程を、武末氏も優位な単位集団が単位集団群の中から析出されてくる過程を、ともに弥生時代中～後期の集落を分析材料としながら指摘している。両氏が指摘する現象から、どのような階層化の進行状況を認めるかが大きな問題となっているといえよう。

最後に、「単位集団(・家族集団)」の存在についての資料解釈の問題が残る。単位集団論の基礎的資料の一つとなった上述の比恵遺跡の環溝集落は、再発掘により溝群の同時併存が否定された[武末1990]。また、高倉氏は宝台遺跡を例にとり複数の小規模集落が墓域を共同で営むと考えたが、近年の研究成果では中期には基本的に居住域と墓域がセット関係で存在する可能性が高く、複数の居住域が一つの墓域を共有するのは大規模な集落に限られる[小澤2000a]。近藤・高倉ら以降の集落論は、単位集団(・家族集団)が居住域と墓域の双方において明らかに把握できることが前提として論が進められてきたが、その立論の根拠となった資料が否定される<sup>(16)</sup>以上、単位集団という概念自体についてもう一度十分に検討をする必要があるだろう。

以上、北部九州における集落からの集団研究史を概観してきた。既往の研究の多くは単位集団論などを通じ渡部氏・和島氏以来のマルクス主義的社会発展段階論の日本古代史学会の立場に強い影響を受けているが、この理解には大きな問題が内包されている。これを取り払うため、既存の研究の影響下から一度離れ、資料を通じて構築し直す必要がある。本稿では、北部九州において近年までに豊富に積み上げられた集落資料を扱いながら弥生時代集団論を構築する作業を試みたい。

## ②……………北部九州における弥生時代集落の展開

### (1) はじめに

筆者はこれまで北部九州において弥生時代集落の展開過程に関する検討を行ってきた。その結果、博多湾沿岸地域(糸島平野・早良平野・福岡平野)においては弥生時代集落の展開過程において前期末～中期初頭と中期末～後期初頭の2つの大きな画期が存在することが判明している[小澤1999・2000a・2000b]。

まず前期末～中期初頭の画期においては、それまで低地帯を中心として分布していた前期集落群が、一斉に平野周辺の低丘陵上に進出するとともに、一部の低地集落が断絶するという動態が顕著に認められる。それとともに、前期社会において拠点的な役割を果たしたといわれる環濠集落が一時的に見られなくなる。

中期末～後期初頭には、先の画期を経て成立した中期集落の大半が一斉に断絶するとともに、わずかに継続する集落には規模の拡大と環濠の再掘削などの現象が認められ、特定の集落に集住が起こったと考えられる。また、集落内を区画する施設が出現する。これらはいずれも弥生時代社会の大きな変化をあらわす現象と考えられる。

また、博多湾沿岸地域以外(北九州地域・佐賀平野域・筑後平野域など)では、このほかに中期中

葉・後期中葉～後葉に集落動態において画期が認められる[cf.小澤2006b<sup>(17)</sup>]。本稿では詳述はしないが、これらの画期は、博多湾沿岸域においてそれぞれ前期末～中期初頭・中期末～後期初頭に起こった社会変化を受けて、(それらと同時期に小さな社会変化は起こるものの十分には社会が変化しきらず、あらためて)少し遅れた時期に同様の社会変化が起きているものと見られる。

本稿では、北部九州地域における以上の集落動態の画期をふまえ、またそれが弥生社会の大きな変動を示している可能性が高いことを考慮し、博多湾沿岸域の集落動態の画期に従って弥生時代を早～前期・中期・後期の3段階に分けて集団間関係の変化を追っていくこととする。

## (2) 弥生時代早～前期の集落間関係と集団

弥生時代早～前期集落の様相を概観したい。以前筆者は早～前期の集落を①環濠集落、②環濠をもたない継続的集落、③小規模・短期廃絶型集落に分類し、①環濠集落は早～前期における拠点集落、②・③は開発におけるフロンティア的集落であって②が定着に成功したもの、③が失敗したものとして位置づけた[小澤2000b]。③を除く多くの前期集落は、出現する時期がいつであれ前期末～中期初頭の画期まで継続し、環濠集落の多くも例外ではない。しかし、環濠集落における環濠はほとんどの場合集落の進出と同時期に掘削されるものの掘削後は急速に埋没しており、掘り直される

例もほとんどない[吉留1994<sup>(18)</sup>]。現状では、環濠集落と他の継続的集落(前期②集落)との差は環濠の有無でしか区分できないため、環濠が埋没してしまえば、その集落はもはや前期②集落との差異はないということになる。一方、早～前期を通じて博多湾沿岸域では、あたかもそれ以前の環濠集落から環濠(とそれに付加された性格)を受け継ぐような形で、環濠集落が次々と平野内の各所に成立している。これらのことは、環濠集落の持つ何らかの役割が、次から次へと新しい環濠集落へと受け継がれているということを示している。環濠集落が地域社会の拠点的な役割を担うものとするれば、その役割はきわめて一時的なものである、言い換えれば早～前期段階における拠点—一般(周辺)集落間の関係は流動的なものであるということを示すと考えられる。

次に、母村—分村関係について考えたい。単位集団論においては、(少なくとも前期段階における)拠点—周辺集落関係は母村—分村関係とイコールと理解されてきた。しかし、もし仮に環濠集落=拠点集落としてよいならば、環濠集落における環濠は分村によって進出した当初に掘削されており、分村が当初から拠点性をもって成立しているというこ

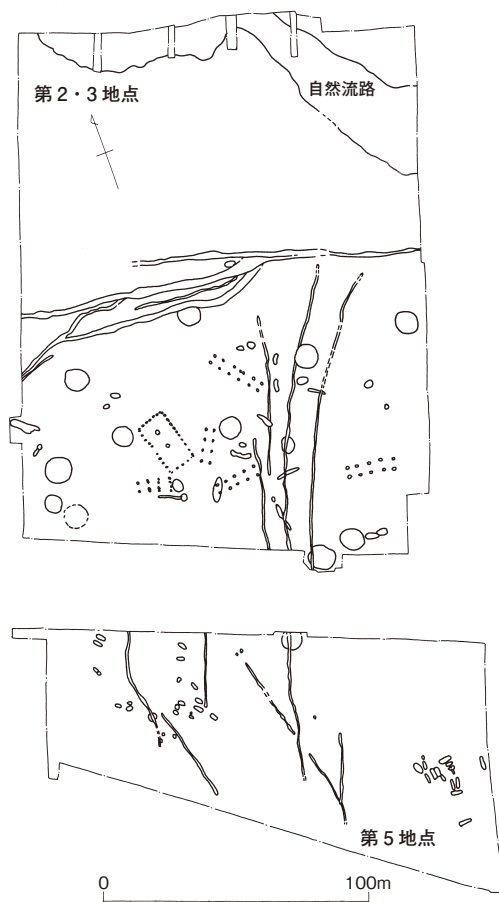


図1 江辻遺跡の集落構造  
〔新宅2002〕より改変、再トレース



とになる。さらに、環濠が失われると拠点性も(他の環濠集落出現により)相対的に低くなると考えられるから、母村-分村関係が拠点-一般(周辺)集落関係となり、それが安定的な関係となるという赤松「溪谷式集落」論における主たる前提の一部は明確に否定されるということになろう。つまり、前期段階における集落間の関係においては、拠点-一般(周辺)という関係が未だ固定化していない、すなわち拠点集落の優位性は確固たるものではなくまた継続的なものでもなかったと理解できるのではないだろうか。

以上の検討をふまえた上で、集落に居住する集団の様相を具体的に見ていこう。

集落の全体像が分かる代表的な集落として粕屋町江辻遺跡がある(図1)。江辻遺跡では博多湾沿岸北部の裏糟屋平野中央部の低地に位置する集落である。遺跡

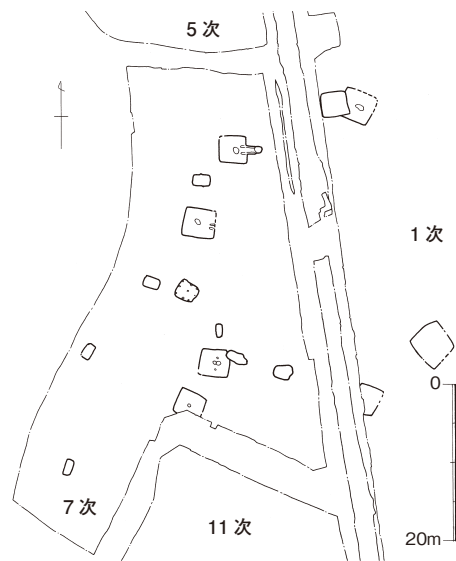


図2 前田遺跡の集落構造  
([山村 1998] より改変, 再トレース)

からは居住関連遺構として刻目突帯文土器期(早期)の竪穴住居群と掘立柱建物群が、また埋葬関連遺構として木棺墓・土壙墓が出土した。住居は全て松菊里型住居と呼ばれる朝鮮半島無文土器文化の影響を強く受けた形態を持ち、掘立柱建物のうち1棟は平地式住居と考えられる4間×5間規模の大きなもの、他は全て棟行1間幅が梁行1間幅よりも長く、桁行間数が多様な、細長いプランの高床建物で、隣接する墓域から発見された木棺墓の構造ものに一般化する組合式木棺ではなく刳抜木棺や舟形木棺であるなど、いずれもきわめて特徴的な形態をもつ[新宅 1996・新宅編 2002]。これらから、渡来人によるコロニー説もあるが、住居が環状に配置する点が縄文時代の環状集落と共通すること、出土土器のほとんどが縄文晩期からの系譜を色濃く示していること、特異な形態を持つ掘立柱建物や木棺墓の類例が現段階では半島でも確認されていないことなどから、渡来人と在来人の交流により成立した初期弥生人の集落と見られる。居住域の周りには浅い溝が環状に巡り、数度にわたって掘り直されていることから、初現期の環濠集落とも評価される。

集落構造は、環濠状溝の内部に竪穴住居が環状に巡り、その内部に高床倉庫と大型掘立柱建物が配置される環状の構造を持ち、全体が大きな一群をなして居住域を分割するような単位の使用は認められない。同様の集落構造をもつ前期集落として、太宰府市前田遺跡が挙げられる(図2)。前田遺跡は、弥生前期前半～中葉の集落遺跡で、集落から検出された竪穴住居跡・(貯蔵穴と考えられる)土坑が環状に配される。これらの集落は、その構造上、居住域が円環状に統合される様相を示し、内部を分割する居住集団が認められないことが特徴といえよう。

一方、江辻遺跡の墓域は、居住域と異なり大きく東西二群に別れており、一方の墓域が土壙墓、もう一方が木棺墓を中心として構成される。ほかに同時期の居住域が付近になく、江辻遺跡の居住集団の内部に墓域を分割する単位が存在した可能性が高い。板付遺跡でも環濠脇の小児棺を中心とした甕棺墓群とややなれた通常の墓域があるが、これは内容から江辻遺跡と同じ性質の群構成とはしがたい。このほかに早～前期段階において墓域形成集団が複数群存在することが明確な事例は

なく、これ以上の検討は難しい。

以上より、早～前期の弥生集落構造は次のようにまとめられよう。①環状の集落構造をもつ例が認められるが、一般的ではない。②居住域を分割する居住単位は認められない。③墓域を分割する単位が存在した可能性がある。

環状集落の存在は集落全体を統合する意識を示すと考えられ、居住域を分割する単位が認められない点はこれを裏付けるものであろう。ただし、大規模な集落には、居住域に現れず墓域にのみ表れる(墓域の造営をともしする点から、おそらく親族集団)が複数共住していた可能性は否定できない[小澤 2006a]。

### (3) 弥生時代中期の集落関係と集団

前期末～中期初頭の画期に、低地帯に広がる前期集落の多くが断絶し、これに代わって丘陵上に多くの集落群が展開する。福岡平野では春日丘陵が、またその近隣では小郡市三国丘陵、飯塚市彼岸原丘陵などが典型的な事例であり、春日丘陵などでは丘陵の尾根という尾根に集落が展開する。これらの中・小規模集落は居住域と墓域が1対1の関係で存在する[小澤 2000a]。一方、須玖遺跡群、三雲遺跡群、比恵・那珂遺跡群など低地帯においても大規模な遺跡群が形成され、これらの大規模集落では内部に複数の墓域が確認される。中期集落の類型を設定する前に、隈・西小田遺跡群を例に中期集落の成立過程を見ておく(図3)。

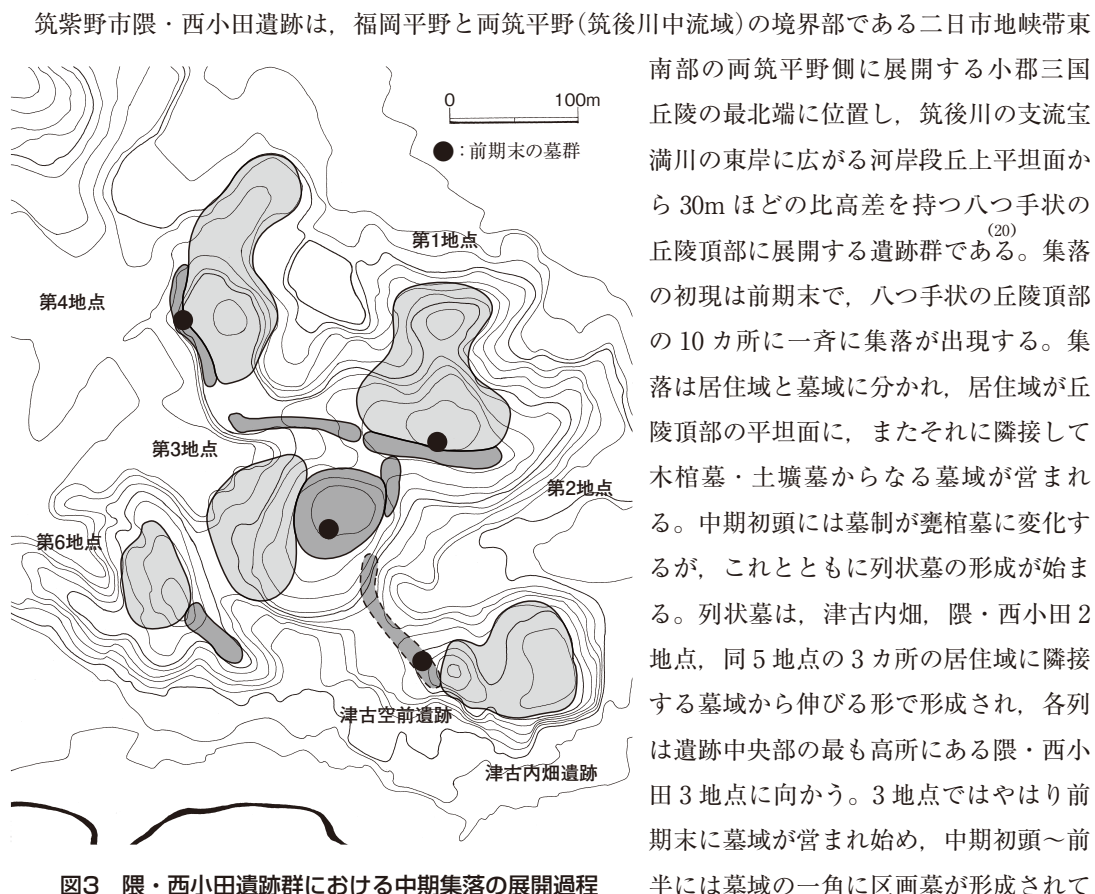


図3 隈・西小田遺跡群における中期集落の展開過程

おり、中期前半までには3本の列状墓が区画墓から伸びて居住域と結合する遺跡群の基本構造が成立する。列状墓(の一部)・区画墓から出土した人骨のDNA分析は列状墓と区画墓の被葬者に共通の血縁集団出身者が存在した可能性が高いことを示しており[篠田・國貞1993]、集落構造を併せ考えると、区画墓が隈・西小田遺跡群(のうち少なくとも3群の居住単位)に居住する集団同士の結合の中心的存在であり、列状墓を通じて遺跡群を形成する居住域同士が相互に結びついていることが理解できる。

隈・西小田遺跡群には、中期以前弥生集団が居住していた痕跡はなく、前期末～中期初頭の画期に各所から一斉に丘陵上に進出した諸集団が以前からなんらかの関係で結ばれていたとは考えがたい。この点は、進出当初の墓域がそれぞれの居住域の近隣に別個に営まれた点からも推測できる。しかし、直後より始まる列状墓と区画墓の形成においては明らかに相互の共同が現れており、集落の成立直後の中期初頭より、各集落同士が墓域を媒介として集団関係を構築しはじめたと考えられる。溝口孝司氏は、列状墓が「建造環境として「共同性」を体現する」[溝口1995, p.186]装置として機能したと指摘するが、これに従えば、隈・西小田遺跡群の列状墓の形成過程は、時を同じくして丘陵上に進出した集団間の「共同性」を体現していると理解でき、かつ、その装置が墓であるということは、共同性の根拠が相互の祖先との関係性に求められることを示す。

さらに、溝口氏は区画墓についても詳細な検討を進めており、弥生中期北部九州の区画墓、特にその前半期に見られる「区画墓Ⅰ」について、①区画墓はその形成過程の特徴と空間構造から考えて単純な「家族墓」とは考えがたい、②「区画」による墓域の区分や甕棺・副葬品などから、区画墓の被葬者群が「ある種」の上位層を構成していたことを推測させるが、被葬者の年齢・性別・血縁関係、副葬品の種類・性格、区画墓の形成過程などを総合すると、区画墓の被葬者群は地域社会を構成する複数の血縁出自集団から(獲得的地位により)選抜された人々が埋葬されている可能性が高い、③区画墓Ⅰはその構造と形成過程から地域社会の一体的な「共同性」の強調を指向していたと理解できる、と指摘している[溝口1997, 1998, 2000, 2001, 2006, 2008]。このことは、弥生時代中期の集団統合の場として区画墓が機能していること、その原理は血縁紐帯にあることを示すものであり、隈・西小田遺跡群における区画墓が同様のものと理解できるならば、隈・西小田遺跡群における区画墓と列状墓の関係(列状墓が区画墓を結節点としてつながり合う)は、双方が一带となって隣接集落同士の血縁的な共同性を体現しているものと理解できよう。

区画墓と大規模な列状墓のセット関係は、吉武遺跡群(「甕棺ロード」・吉武樋渡墳丘墓)、吉野ヶ里遺跡(二列埋葬墓・北墳丘墓)などで見られる。このことは、区画墓と列状墓による集団関係の表現が弥生時代中期には一般的であったことを示唆しており、ひいては弥生時代中期における集団関係が相互の血縁的な関係により構成されていたことを示す。区画墓と大規模な列状墓はまさにその表現であり、同時に、集団関係維持・強化のための装置として機能したのである<sup>(21)</sup>。従って、区画墓や大規模な列状墓、さらには「超大型」の掘立柱建物などを有する集落は集団関係における結節点として機能したと考えられ、まさにその点において、これらを有する集落が中期における「拠点集落」と評価できるのである<sup>(22)</sup>。

ただし、隈・西小田遺跡群を除く中期の大規模集落ではこれまで集落内の居住集団が明確に確認された例はない。上述した中期の拠点集落と見られる比恵・那珂遺跡群や三雲遺跡群、須玖遺跡群



などでも、調査範囲に限界がありはっきりとは分からないが、これまでのところ集落内に明確な居住単位は確認されていない。この点をふまえ本稿では、隈・西小田遺跡群の事例は丘陵上に立地するという立地条件によりたまたま集落内集団が居住集団として現れたものであり、むしろ中期の大規模集落においては集落としての統一性が集落内集団の自立性よりも優先され、その結果として集落内集団が居住集団として明瞭化しない方が一般的であったと理解したい。

さて、以上をふまえ中期集落の類型化を行っておく。まず、中期①集落として区画墓や大規模な列状墓(・超大型建物)を持つ大規模な集落を設定する。この集落内には墓域がしばしば複数確認される。前原市三雲遺跡、福岡市吉武遺跡群、同比恵・那珂遺跡群、同赤穂ノ浦遺跡群、春日市須玖遺跡群、筑紫野市隈・西小田遺跡群などをこの類型とする。次に中期②集落として中規模で墓域を1カ所に伴う集落を設定する。このタイプの集落は隣接地に居住域と1対1の対応関係を持つ墓域を形成する。前者が中期における拠点集落、後者は一般(周辺)集落である。拠点集落の集落構造について隈・西小田遺跡群の例を見ると、全体を大きな一つの拠点集落(または村落)として把握した場合、その内部は尾根を単位とした複数の居住域より構成されることは形成過程より明らかである。ただし、隈・西小田遺跡群において居住集団が明瞭化している状況は丘陵上に展開する拠点集落というやや特殊な事情に起因するものと考えられ、広い居住域を確保しやすい低・平地帯の拠点集落ではこういった居住域が明瞭に現れる確実な例は今のところない。以上から、拠点集落の内部に複数の集団が存在する可能性は高いが、それが明確に区画されることはなく、一般的には顕在化せずに集落全体の中に埋没し、積極的に自己主張することはないのが、中期拠点集落の特徴であるとまとめられる。墓域については、三雲遺跡群や比恵・那珂遺跡群、須玖遺跡群などにおいて、区画墓などの拠点集落に特有の墓域の他に小規模な墓域が集落内に複数認められるが、これらがどのような性格のものか判断できる資料には恵まれていない。ただし上記のような集団単位に対応する可能性は高いと考えられる。

最後に、中期における拠点—一般(周辺)集落・母村—分村集落の関係についてみておきたい。

中期における拠点集落の拠点性については、上述のように、祖先祭祀を軸とした集団の血縁的結合の結節点が第一義的な背景と理解し、その機能を持つ装置として区画墓と大規模な列状墓の存在を挙げた。区画墓の成立については、筑紫野市東小田・峰遺跡で前期の可能性が指摘される資料があるが、それ以外では板付田端遺跡(未調査・消滅)、吉武高木遺跡の二例が前期末で最も古い。両者はともに中期初頭までに区画墓としての機能を終えている<sup>(23)</sup>。一方、中期初頭～前半までに出現する区画墓はおおよそ中期末前後まで安定して埋葬行為が継続される。これは、集団結合の祭祀の場が中期初頭以降固定化したことを示すが、祖先祭祀を伴う以上、ある程度の深度の祖先意識を伴えば、祖先が埋葬された場である区画墓の場所が易々と移動する訳にもいかないから、当然のことではある。しかしながら、この区画墓の不動産的性格は中期拠点集落を形作るに至った重要な特質であり、注目したい。すなわち、前期段階の拠点集落と目される環濠集落は拠点性が継続しないことが特徴であったが、中期においては区画墓の不動産的性格から拠点性が移動しない(できない)という特徴が新たに成立し、この結果前期とは異なり拠点集落が中期を通じて拠点集落であり続けるという結果を生むことになったと考えられるのである。また、おそらくこの結果として、前期においては流動的であった拠点集落と一般(周辺)集落の関係が中期においては固定化した可能性が高く、



さらにこれにより祖先祭祀における世代深度の深まりも誘発されたであろう。よって、中期の集落間関係における拠点性は集落が成立した後になって作られ、固定化するものと理解でき、従って中期の拠点集落の拠点性は母村－分村関係とイコールではないといえる。<sup>(24)</sup>

では、中期社会における拠点－周辺集落関係はどのような原理により構成されているのであろうか。隈・西小田遺跡群における集団関係の構築の仕方を見る限りでは、画期後に近隣集団同士が相互に関係を構築しており、この点から見れば中期の拠点－一般(周辺)集落の関係は「地縁的」な関係であるということもできよう。ただし、これまで述べてきたように集団間関係は祖先祭祀を通じて構築された血縁的關係により構築されていることは明らかである。血縁か地縁のどちらかという二項対立ではない文脈で集団関係を整理することが必要であるともいえるが、集団関係の原理が血縁関係である以上、拠点－一般(周辺)集落の関係は第一義的には血縁原理により結ばれていたと理解すべきであろう。<sup>(25)</sup>すなわち、前期末～中期初頭の画期により、集落編成の実態は大きく変化せざるを得なかったが、その結合原理は前期段階と変わらずに踏襲されたのである。

#### (4) 弥生時代後期の集落と集団

前期末～中期初頭に成立した中期社会における集団関係は中期を通じて安定して継続するが、中期末～後期初頭にいたって大きく変化する。中期集落の大半の断絶と、残った集落の規模の拡大や居住密度の増加などから、特定の集落への「集住」が起きたと見られる[小澤 2000a]。博多湾沿岸地域においては、集住の対象となった集落は中期段階における拠点集落の場合が多いが、周辺地域ではしばしば全く新しい場所に集落が形成される。なお、これにより後期初頭～前半期の集落数は激減し、集住現象の起きた集落にほぼ限られることになる。集住集落のあり方を、いくつかの遺跡を例にとってみたい。

筑紫野市以来尺遺跡は二日市地峡帯南西部の丘陵上に中期前半に進出する集落で、中期後半には大型の掘立柱建物が見られるなど、中期段階においては拠点集落に次ぐ集落であったと推測される。中期の集落は丘陵上の平坦面に限定して広がっているが、中期末～後期初頭の画期に集落構造が大きく変化する。居住域が丘陵斜面に向かって広く展開すると同時に住居の密度が増し、また集落中央部に断続的に続く浅い溝状遺構により区画された細長い通路状の空地が形成さ

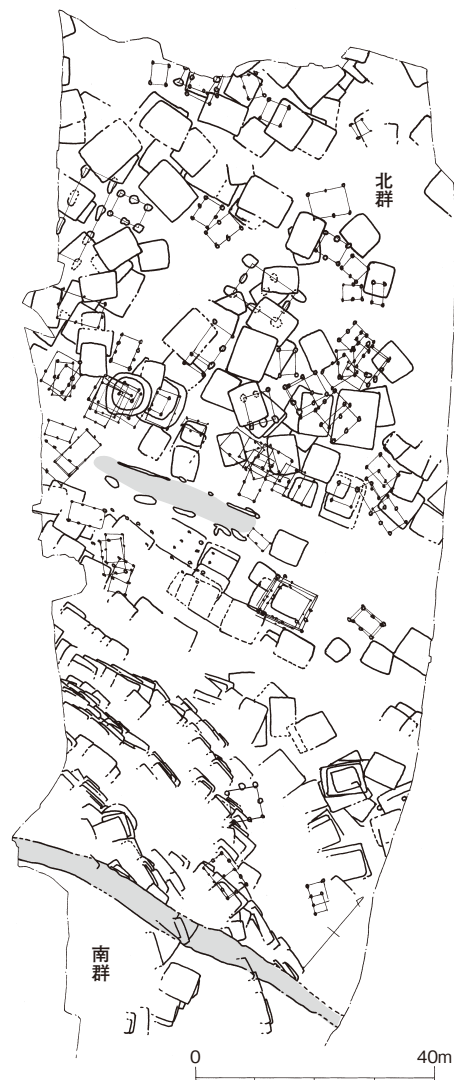


図4 以来尺遺跡の集落構造  
([杉原編 1999] より改変, 再トレース)

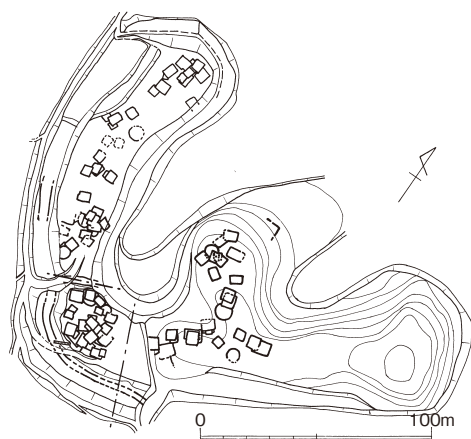


図5 大南遺跡の集落構造

([佐々木編 1976] より改変, 再トレース)

居住域の内部を何らかの施設により複数に分割することである。この構造は、後期以降の大規模な集落の特徴であり、注目される。博多湾沿岸地域以外ではこの変化はやや遅れて後期中葉前後に現れ、例えば学史的にも有名な佐賀県基山町千塔山遺跡では、後期後葉～末の集落が溝に3本の尾根状単位に分割されて3つの居住集団を構成する(図6)。また、後期中葉に小郡市三国丘陵上に進出する三国の鼻遺跡でも、丘陵上から斜面に展開する集落を環濠で囲い、さらに内部を溝により2分しており、集落全体が溝に囲まれた二つの居住単位から形成される形となる(図7)。

一方、複数の集落が同時期にごく近接して営まれ、あたかも一体的な集落であるかのような様相

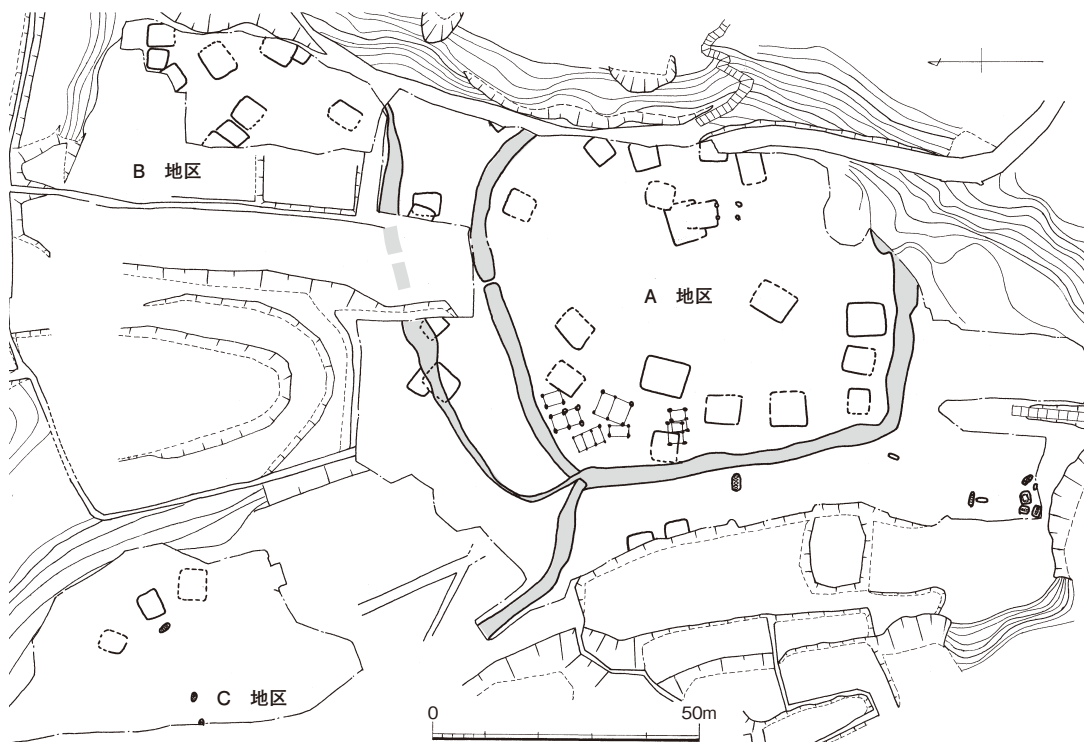


図6 千塔山遺跡の集落構造 ([中牟田編1978] より改変, 再トレース)

を呈する事例も見られる。早良平野西部を北流する小河川である十郎川の中流域にある福岡市野方遺跡群では、後期中葉に野方中原遺跡という集落が出現し、径100m程の長卵形の環濠集落を形成しながら古墳時代初頭まで存続するが、これとほぼ同じ時期に十郎川を挟んだ対岸に野方久保遺跡という集落が営まれる。両者の距離は150mほどと川を挟んできわめて近接し、存続時期も一致し、相互に密接な関係があったことが想定されるが、野方中原遺跡には調査区内に小規模な墓域がある一方、野方久保遺跡には南に野方塚原遺跡という墓域が隣接し、それぞれが完結した集落体としての姿をも持つ(図8)。また、筑後川中流域北岸では、後期中葉～末の多重環濠集落として、低平地中の微高地に立地する朝倉市平塚川添遺跡がよく知られるが、この北側の段丘上に隣接して平塚山の上遺跡というほぼ同時期の集落があり、集落の出現・消滅時期が一致する。平塚川添遺跡には栗山遺跡、また平塚山の上遺跡には平塚大願寺遺跡という墓域が付属し、両者はそれぞれ集落体として完結した様相を持つが、両者のあいだの距離は100m程度ときわめて近く、集落動態も共通していることから、互いに密接な関係があった可能性が高い。

以上、後期の大規模集落として、居住域が溝などにより分割される遺跡と、複数の集落体が近接して営まれる「集落群(あるいは村落)」とでも呼ぶべき遺跡が存在することを指摘した。前者は全体が一つの集落としてのまとまりを持つ一方、後者はそれがやや弱い点で異なり、ここでは前者を

「区画集落」、後者を「区画村落」と呼んで区別するが、ともに複数の居住集団が近接して併存する状況に違いはない。このように、明確な居住集団が区画分子として顕在化する点が、後期の大規模集落の最大の特徴であろう。後期の集落はこの大規模な区画集／村落と、区画分子の見られない中・小規模集落からなると見られる。

区画集／村落における区画された集団(居住集団)について検討したい。野方遺跡群では併存する居住集団のそれぞれに倉庫や墓域が付属していた。居住域のみが確認されている以来尺遺跡では、二群ある居住域の双方に数種類の掘立柱建物が確認される。平塚遺跡群でも、やはり平塚川添遺跡

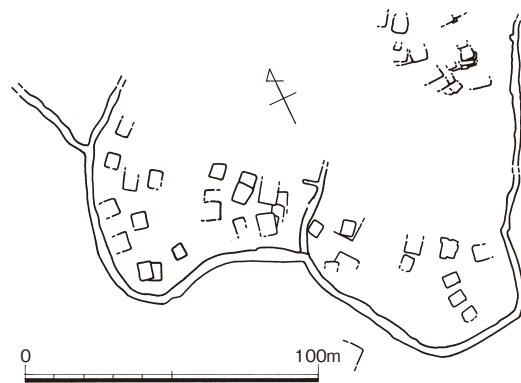


図7 三ノ鼻遺跡群の集落構造  
([中島・平川編 1987, 片岡編 1988]より改変, 再トレース)

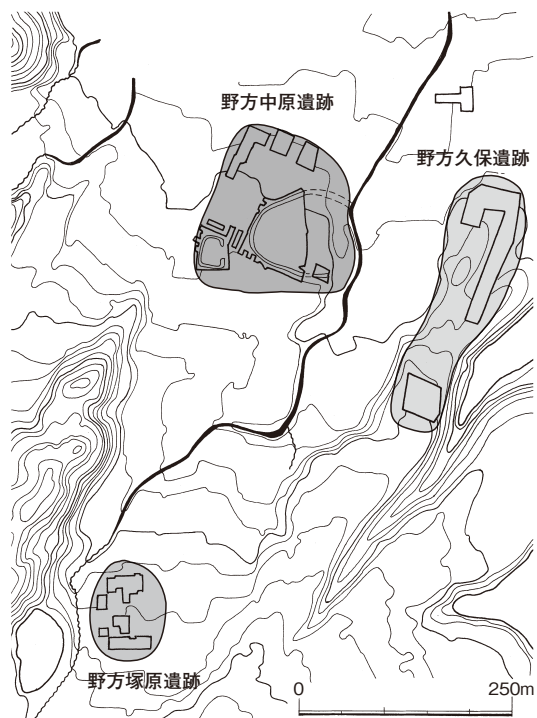


図8 野方遺跡群の集落構造

・平塚山の上遺跡のそれぞれが墓域や掘立柱建物を有する。これらより、後期集落における居住集団はそれぞれが貯蔵や墓域の経営においてある程度自己完結的な存在であることが分かる。これらの点は、中期の隈・西小田遺跡群において顕在化した尾根単位の居住単位群の特徴と共通し、それ自体が単独で集落の経営体となりうるような単位であることが推測される。先に、隈・西小田遺跡群の集落構造より、中期の拠点集落においてはこのような単位が集合して大規模な集落を構成するが単位が明瞭な隈・西小田遺跡群のような事例は例外的で、一般的にはこれが明確な居住単位としては明確化しないと述べた。中期末～後期初頭の画期を経て、これが居住集団として明確化した結果

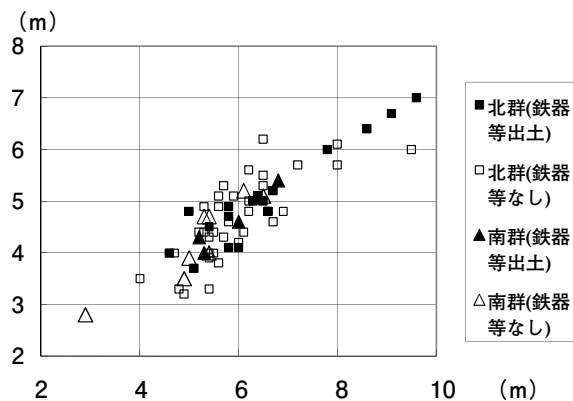


図9 以来尺遺跡の住居跡サイズ

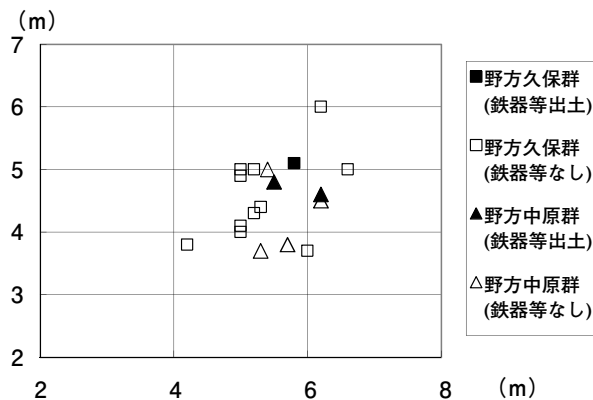


図10 野方遺跡群の住居跡サイズ

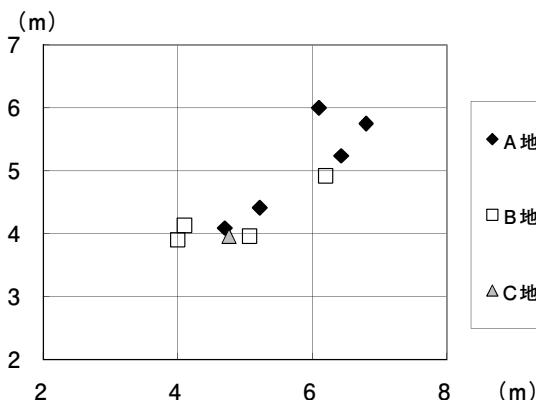


図11 千塔山遺跡の住居跡サイズ

果成立したものが、区画集／村落であると理解できよう。

さて、この区画分子は下條氏の指摘[下條 1986]の通り後期を通じてその内容を変化させていく。以下にいくつか例を挙げて区画分子の内部構成の変遷を追いたい。

後期初頭に成立し、後期末葉まで継続する区画集落である、以来尺遺跡の南北両群の竪穴住居跡と掘立柱建物の規模を比較したものが図9である。南群が斜面にあって削平等により住居の片壁が失われているものが多く、特に大型の住居の規模が判明しないことを考えると、住居跡の規模は南北2群ではほぼ変わらないとして良いだろう。また、鉄器の保有率も大差はない。一方、掘立柱建物の規模と数を比較すると北群が掘立柱建物の規模に変異が大きく数も多いほか、北群には小さな円形周溝に囲まれた1間×1間の掘立柱建物が見られる点が特徴的である。これらから、以来尺遺跡においては区画分子相互の間に明確な差は生じていないが、北群がやや有意にあるかもしれない状況と考えられる。

後期中葉に進出し、後期末葉以降まで継続する区画村落である野方遺跡群の、野方中原群と野方久保群の竪穴住居の規模を比較したものが図10である。野方遺跡群における2群の区画分子間においては、住居跡や掘立柱建物の規模構造に差は見られないが、野方中原遺跡には環濠が掘削される



ほか方形環溝を伴う掘立柱建物があり、集落構造においてはやや野方中原遺跡の区画の方が優位にあると見て良からう。一方、墓域における副葬品の内容を検討したものが表1である。野方中原遺跡の墓群は完掘例が少ないが、それにもかかわらず副葬品を保有する墓の数、副葬品の内容において野方中原墓群の方が優位にあることが分かる。

後期後葉に進出し、後期末葉以降まで継続する区画村落である千塔山遺跡では、丘陵の形状に従ってA～Cの3つの区画分子が見られ、最も大きいA群を囲むように2度にわたって区画溝が掘削されている(図6)。この遺跡では、A群には石棺墓を主体とした墓域、C群には石蓋土壙墓を主体とした小規模な墓域が見られ、B群には墓域が見られないこと、また掘立柱建物がA群の環濠内にしか見られないことなどから、区画分子間に階層的な差が生じていることが、下條氏によりすでに指摘されている[下條1986]。これに加え、堅穴住居の規模を群ごとに比較したものが図11である。これを見ると明らかにA群の堅穴住居の規模が大きく、この点もあわせ千塔山遺跡では区画分子間に階層的な差が生じつつあることが理解できる。

このように、後期初頭に集落内において明瞭化した区画分子は、後期を通じて徐々に相互の間の格差を拡大させていく動きを見せる。これは後期社会を理解する上で重要な点であり、後述したい。

(5) 弥生時代集落の基礎構成集団

以上、弥生時代早期～後期にかけての弥生時代集落のあり方を概観してきた。簡単にまとめておきたい。

弥生時代早～前期には、集落内を分割するような居住集団は認められない。むしろ、早期の集落には住居以降を環状に配するなどの事例から集落内の居住集団の一体性が強く感じられる。一方、墓域においては内部に群構成を見せる事例がある。以上から、早～前期には集落内部を分割するような集団がすでに存在する可能性はあるが、居住域において顕在化しないといえる。弥生時代早～前期段階の集落規模を見ると、中期・後期の拠点集落などと比べて明らかに小さいことから、前期集落は基本的に単独の居住集団により形成されていたと考えたい。

前期末～中期初頭の画期を経て成立した中期集落では、区画墓が成立し、また祖先祭祀を共有する近隣集団同士が大規模な集落を形成することによって、拠点集落が成立する。拠点集落の内部には区画墓・大型の列状墓の他に複数の墓域が見られることから、内部に複数の集団が存在する可能性が高い。隈・西小田遺跡群ではそれが居住集団という形で表れており、倉庫を独自に有し墓域造営における基礎単位となっていることから、これらの居住集団が単独で集落を形成しうる集団であることが分かる。すなわち、中期における拠点集落は、個々が単独で集落を形成しうるような集団が複数集合することにより形成されていると考えられる<sup>(28)</sup>。しかしながら、一般的に中期の拠点集

表1 野方遺跡群における墓域の内容比較

野方塚原遺跡					野方中原遺跡				
遺構	時期	副葬品	土器	備考	遺構	時期	副葬品	土器	備考
1号甕棺墓	後期末	獣帯鏡片2 (研磨なし)			1号甕棺墓				不明
2号甕棺墓	後期末				2号甕棺墓		丹		
3号甕棺墓	後期末	○(祭祀遺構)		小児	3号甕棺墓				不明
1号石棺墓				小児	1号石棺墓		獣帯鏡片・勾玉・ 管玉7・素巻頭 刀子・鉄刀		
2号石棺墓					2号石棺墓				不明
3号石棺墓	後期末		○(棺外)		3号石棺墓		内行花文鏡片・ 勾玉・管玉・ガ ラス小玉2		
4号石棺墓	後期末		○(棺外)		4号石棺墓				
5号石棺墓				小児	5号石棺墓		ガラス小玉11		
7号石棺墓				小児	6号石棺墓	後期末		○(棺外)	盗掘
8号石棺墓				小児	7号石棺墓				
9号石棺墓				小児	8号石棺墓		鉄器(棺外)		未掘
10号石棺墓				小児	9号石棺墓	古墳初		○	未掘
11号石棺墓				小児	10号石棺墓				未掘
12号石棺墓					1号木棺墓				未掘
13号石棺墓					1号土棺墓				未掘

※野方中原遺跡は概報のみであるため遺構の時期等に不明なものが多い。

落においてはこれらの集団が居住域において居住集団として明確に現れない。この点は中期社会の性質をよく示す特質と考えられ、注目される。

中期末～後期初頭の画期を経て、集落の内部構造が大きく変わる。後期初頭～前半期の博多湾沿岸域では「集住」現象によって多くの集落の規模が飛躍的に大きくなるが、この大規模な集落の内部を人為的に区画することにより、大規模集落内部に存在する複数の居住集団を明確に示すようになる、あるいは複数の集落群が密集して立地し、大規模な村落を形成する。区画集／村落の成立である。区画集／村落における居住集団は、区画村落において単独の集落を形成していること、区画集落でもしばしば倉庫や墓域を個々に有することなどから、この集団が集落を構成する基礎単位であることが容易に推測される。すなわち、後期における大規模集落は、中期のそれと同様、個々が単独で集落を形成しうる集団が複数集合して形成されていると理解できる。ただし、中期と大きく異なるのは、居住域においてこの基礎的な集団が明瞭に析出されている点である。後期初頭に明瞭化した区画分子は、後期を通じて相互のあいだの格差を徐々に拡大させる動きを見せている。この二点は後期社会の特質をあらわす極めて重要なポイントである。

さて、後期の大規模集落を構成する複数の居住集団は、中期の拠点集落を構成する(と考えられるが、集落全体の中に埋没する)複数の集団と共通した特徴を備えており、同じ性格を持つ集団と考えられる。しかしながら、集団の規模は中期と後期で大きく異なり、後期の方が集団の規模が大きい。同時併存の住居の数を特定するのはきわめて難しいが、少なくとも中期段階においては数棟、後期段階においては十数棟程度以上が考えられ、2～3倍以上の規模になっている可能性が高い。これは、中期末～後期初頭の集住時に、集落内に見られる集団の数が変わらないか、もしくは減少するためと考えられる。集住により形成された集住集落で居住集団の数が少なくその規模が大きいということは、中期段階における集団の統合が起きていることを示している。さらに、統合により新たに形成された後期の居住集団が中期の集団と同じ性格を持つと考えられることは、この集団が容易に他の集団を吸収・統合して規模を大きくすることができる(あるいはその逆もできる)という基本的な性格を持つものであることを示す。この点をふまえ、このような集団について次のように基本的な定義を行っておく。

- ① 単独で集落を構成できる。近藤氏が「単位集団」の、また高倉氏が「家族集団」の根拠とした沼遺跡や宝台遺跡のような中期の小規模集落は、この集団が最小規模で単独の集落を構成したものと考えられる。
- ② 複数の集団が集合して大規模な集落を形成することができる。中期の拠点集落や後期の区画集／村落は、この集団が複数集合して大規模な集落が構成されている。
- ③ 規模は一定ではない。①のように最小規模では2棟前後で一つの集落を構成するようなものもあれば、②のように大規模な集落を2～3程度に分割し、一つの集団が十棟程度以上から構成されることが考えられるような事例もある。
- ④ 集団同士の統合が比較的容易に起こりうる。中期末～後期初頭の画期における集住現象は、この性格が背景にあると考えると理解しやすい。

以上のような集団の姿は、従来の研究史におけるどの集団像にも当てはまらない。特に、集団の規模が可変的であるという点は、堅穴住居数棟からなるとする単位集団・家族集団、20棟前後と

する基礎集団[若林 2001]などとの大きな違いである。従って、この集団について新たな名称を付加することが必要である。ここでは、後期の区画集落における区画分子となっているという集団の性格をふまえ、「分子集団」と呼びたい。なお、分子集団より下位に単位集団・家族集団といった集団の姿を北部九州の集落資料から読み取ることは難しい。田崎博之[田崎 1989a・1989b・1990]によるような新しい切り口を期待したい。

### ③……………弥生時代社会の集団関係

以上の分析をふまえた上で、文化人類学における親族論の概念を援用しながら弥生時代社会における集団関係の発展過程をまとめることとしたい。

まず、弥生時代早～前期の集団関係であるが、早期の集落形態にしばしば環状集落が認められることなどから、仮に集落内部に複数の分子集団が存在したとしても、それらは顕在化することなく集落内部に埋没していたと考えられ、現象面においては堅穴住居(に居住する集団＝家族)の上位集団は集落居住集団となる。従って、この時期の集団関係は、現状の資料からは集落間関係と読み替えざるを得ない。

早～前期段階の集落間関係は、拠点集落と目される環濠集落と、その他の(一般)集落の関係で構成される。環濠集落の拠点性は、集落の進出直後より環濠が機能していた短期間に限られ、一時的なものであることから、集落間に固定的な階層差はないと理解できる。また、環濠集落は分村により成立しており、母村－分村関係と拠点－周辺集落関係がイコールでないことは、環濠集落の拠点性が固定的でないことと関連して、継続的な母村－分村関係といった固定的な上－下関係が未発達であることを示す傍証となろう。これは、前期段階の水稻農耕が他集団からの大規模な労働力の結集を必要とする程の規模でなく、また河川の制御や水資源の共有における集団間の調節機能なども不必要であったこと、さらには人口密度などの側面から、集団間の関係を固定化するような動きが十分には発達しなかったことの現れととらえられよう。

以上の点、また先行する縄文時代晩期が部族社会と考えられること[田中 2000]、後述する中期の集団関係から、弥生時代早～前期段階の集団関係は、(おそらく分村などを軸として結ばれた)血縁紐帯の網の目により各集団が集落単位で相互に結合し、一時的かつ不安定な拠点性を持つ集落を軸に比較的平等的な部族的集団関係を構築していたと考えられよう。

次に、弥生時代中期の集団関係についてみてみたい。前期末～中期初頭に集落は一斉に丘陵上に進出するが、その原因の一つとして以前に居住地と可耕地の安定化志向が存在した可能性を指摘した[小澤 2000b]。近年の研究では、前期末～中期にかけて気候の変化により低地帯の居住環境が悪化した可能性が指摘される[cf. 水島編 1994・高橋 1995]が、この住環境の悪化と人口増加、そして半島からの渡来などの諸原因が積み重なった結果、集落立地の変化、すなわち居住地の丘陵域への拡大が生じ、これに伴い前期的集団関係の組み替えが起こったものと見られる。

さて、前期末～中期初頭の画期において丘陵上に展開した集落は、近隣集落同士で新たな集団関係を構築する。隈・西小田遺跡群では、この新たな集団関係の構築に際し、祖先祭祀の共有という手段を使っており、この集団関係が血縁関係を軸に結ばれていることがわかる。この点で、前期末

～中期初頭の画期に成立した集団関係は、たとえ地理的な近接が実態としての集団関係の構築の理由として存在した(その可能性は極めて高いが)としても、血縁関係を基軸とした部族的な集団関係であることは明らかである。

中期的な集団関係を構築する際の舞台となった区画墓や大規模な列状墓が前期末～中期初頭の一時期を除き固定化されたことは、共有する祖先の世代深度、ひいては認知される集団関係の世代深度が少なくとも数世代程度の深まりを持つものであった(あるいは、持つものになっていった)ことを示しており、これは新たに構築された集団関係が安定・固定化したことを示している。その結果、集団関係の結節点となった集落が拠点集落として固定化され、中期的集団関係が安定した関係として固定化するに至ったと考えられる。この結果、博多湾沿岸域では中期集落の動態はきわめて安定した様相を示す。

しかし、安定した部族的集団関係として形成された中期的集団関係は、当初からその内部に階層分化への胎動を見せていた。早～前期においては集団結節の中心的役割を果たす優位集団は未だ

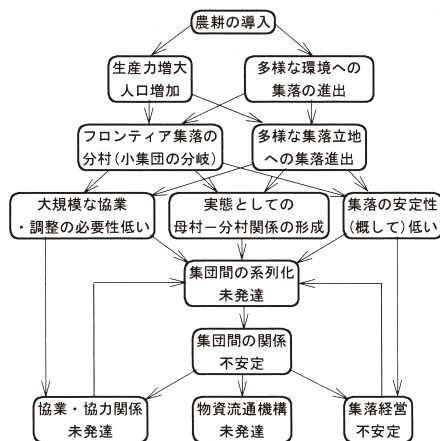


図12 前期的集団関係

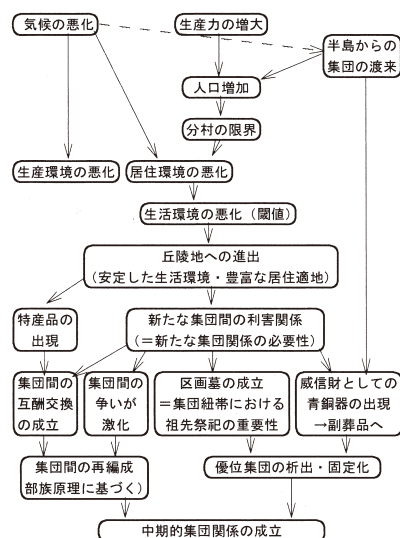


図13 前期的集団関係の崩壊と中期的集団関係の成立

不安定で、容易に入れ替わる存在であったが、中期的集団関係においてはその固定化が進行しつつあったのである。しかし、このような優位-劣位といった集団間の階層化の進展の動きは、極めて緩やかなものであった。田中良之氏によれば、中期前半期に構築が開始される区画墓の被葬者は、部族や部族内のクラン(的集団)から選抜された「達成者」的な人物であって、その地位は偶発的で、世襲傾向を持たないという[田中良2000]。また、溝口氏はこれを区画墓Ⅰとし(上述)、これに後続して中期後半に成立する区画墓を「区画墓Ⅱ」とし[溝口1998]、区画墓Ⅱでは墓域内部に複数の墓を意図的に連続的に切り合わせながら構築する小「系列」がみられることから、集団間の地位や財の継承に偏りが生じつつあった可能性がある」と指摘する[溝口2000]。これに従えば、中期前半には未だ各集団の平等性は集団関係上も実質的にも確保されていたが、中期後半には実質的に地位や財の継承権の確保において優位に立つ集団が出現しつつあり、中期を通じて徐々に集団間の格差が出現しつつあったものとも理解できよう。

しかし、このような格差は、墓制以外においては明瞭に現れない。中期集落の居住域においては、集落全体の一体性が強調され、隈・西小田遺跡に偶発的に現れた分子集団は、一般的には影を潜めており、集落内部に存在したであろう居住集団の存在は覆い隠されていた。格差の単位であるべき居住集団は中期を通じて明瞭化しない



のである。

居住という日常的シチュエーションにおける平等的様相と、墓域という集団紐帯を強調する非日常的シチュエーションにおける系列化・序列化への胎動という正反対の様相は、中期段階における優位－劣位集団の関係や集団間の系列化の状況が、未だ上下関係として確定していないことによる、日常生活における平等性・集団性の強調と、財や地位、それらの継承権が潜在的に偏りが生じていることを反映する、墓域における潜在的な系列化の主張という、相反する二つの行為の戦略的な配置を想起させる。<sup>(29)</sup>これは、墓への副葬という青銅器の属人的性格と、集団紐帯を強調するため

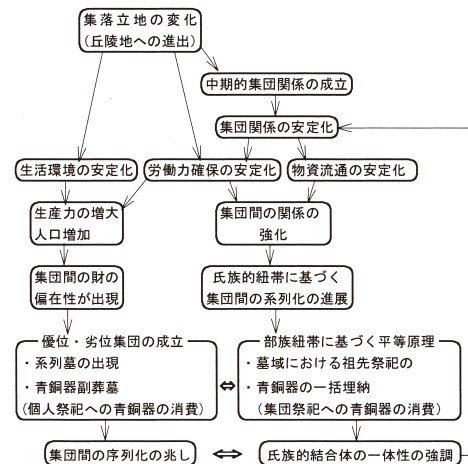


図14 中期的集団関係の安定化

とししばしば主張される青銅器埋納祭祀という青銅器の集団的性格の、二つの相反する青銅器の消費方法に現れた、集団間の格差と集団全体の共同性の双方の強調を推測させる活動と、軌を一にした動きとも考えられ、興味深い。ともかく、中期社会は階層社会への萌芽を内包しつつ（墓域における財の所有単位や系譜関係の顕在化）も、それを部族的集団関係によって覆い隠す（居住域における財の所有単位の隠蔽）ことにより安定した平等的社会を形成していたものと理解できよう。

中期末～後期初頭の画期に、中期的な集団関係は突如として崩壊する。中期の間中安定して存続してきた多くの集落が一斉に断絶していくつかの集落に集住し、区画集／村落が成立する。大規模集落を構成する複数の分子集団が、居住域において明瞭化するのである。中期段階にはこうした集落内部の居住集団の存在は顕在化していなかったが、後期になると日々の生活区域が明瞭に人為的な施設によって区画され、否が応でも生活者は分子集団の存在を明瞭に意識し、日々再確認することになる。このことは、集団関係における分子集団の性格の（劇的な）変化を示すと考えられる。

居住域における集団の明瞭化は、分子集団のみならず他の様々な位相においてこの時期に一斉に生じており、注目される。福岡湾沿岸地域では、中期末～後期初頭以降にかけて、集落の周囲に環濠を掘削する、あるいは既存の環濠に土器を大量投棄する例が目立つ。このことは、集落の外延、いかえれば居住集団の範囲を強く意識したことを示す。さらに、こうした集団範囲の意識化はより大きな単位においても発現する。福岡平野・糸島平野を中心とした地域勢力が隣接する地域に積極的な働きかけを行った結果、両地域の間にある早良平野の中央部では一時的に集落が全く見られなくなる。この結果、糸島平野域（「伊都国」）と福岡平野域（「奴国」）の境界が明瞭化し、両地域集団が地域的な範囲を持つ集団とし確立する〔小澤2002〕。

このように、区画分子・集落・地域単位の各位相において集団意識が高揚する現象は、何を表しているのか。まず、この画期における集団意識の高揚が、集団の大規模化（集住）と自集団の範囲の明確化（区画化）という動きで現れている点に注目したい。そして、これをふまえた上で、弥生時代中期後半以降、日常生活の場として共同性が志向される傾向の強い居住域とは対照的に、集団性と系譜を意識させる場としての墓域において、財や地位の継承権に関して優位に立つ集団が表れはじめるという溝口氏の指摘をも考えるとき、J・フリードマンとM・J・ローランズが示した部族社

会から首長制社会への移行過程の仮説は、示唆に富むものである。

J. フリードマンとM. J. ローランズは、平等的な血縁紐帯により組織化された部族社会から、血縁集団が階層化した首長制社会へと移行する際に、財を蓄積させることにより居住集団を拡大し、力を蓄えて優位な地位を築き、富へのアクセスを求める周囲の劣位集団を自集団の血縁系譜に組み込むことにより、集団間の系列化・序列化を進めるという過程を描いた[Friedman・Rowlands1977]。

以上のような仮説をふまえて中期末～後期初頭の画期における諸現象を解釈するならば、次のような理解が成り立つであろう。まず、中期後半の特定墓への富の集中(厚葬墓の出現)と、溝口が指摘する墓域における系譜意識の現れは、特定の集団への財の蓄積と、蓄積された財の継承権をめぐる集団内・間における系列の出現を物語っていると理解される。中期後半に出現した財や権利へのアクセス権限の偏りは、生産力の増大という一般的傾向を認めるならば、中期末に至るまで基本的にはその偏在性が徐々に拡大する傾向にあった可能性が高い。ところが、居住域においてはこのような差は全く表現されていない。これは、例えば青銅器を用いた集団祭祀や墓域における集団性の強調、物資流通による互酬性などの、様々な中期的・平等的・部族的な社会関係維持機能により、集団間に芽生えつつあった格差を押しとどめ、隠蔽する戦略の一環ではなかったろうか。

中期末～後期初頭の画期にいたって、この格差の増大がもはや覆い隠せないレベル(閾値)に達したならば、部族的集団関係を基礎とした平等的な集団関係という均衡状態は一気に崩壊して社会

は急速に新たな社会関係を構築すべく変化したであろう。まず、中期段階に部族的紐帯により抑圧されていた潜在的な優位集団は、財や権利へのアクセスにおいて優位に立つため劣位集団を積極的に吸収して自集団の規模の拡大を図る一方、劣位集団も積極的に優位集団に吸収されようとしたであろう。これら二つの効果があいまって、集団規模が急速に増大したと考えられる。

一方、優位集団の内部においては、ライバルに対して財や権利へのアクセスを制限するために、自集団の無制限の拡大を制限することにより集団内競争者をできるだけ少なくしようとする動きが同時に起こったのではない。これにより、自集団の範囲の明確化(区画化)・他集団とのあいだの区画の強調という動きが起き、居住集団の明確化により区画集落が出現することになったのであろう。このように、中期末～後期初頭の画期において、集団関係における新たな動きが急速に進展する中で、集団関係における様々な位相において「集住」と「区画」という特徴的な集落動態が現れたと考えられるのである。

以上のような集団関係の大きな変化により、新たな

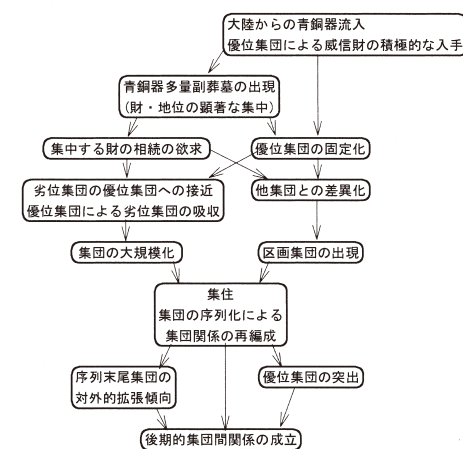


図15 中期的集団関係の崩壊と後期的集団関係の成立

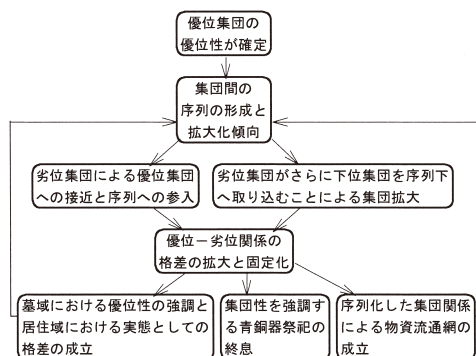


図16 後期的集団関係の進展

集団関係が成立する。これを後期的集団関係とする。後期的集団関係は、中期末～後期初頭の画期における大きな社会変革の軌道に則って、集団間の序列化の進行という方向性を内包しつつ形成される。中期末～後期初頭の画期において明瞭化した集落内の分子集団が、後期を通じて徐々に互いの差異を拡大させていく過程は、区画分子間における住居跡や掘立柱建物等諸施設のサイズや数などを材料として、すでに見てきたとおりである。この差異は、中期段階においてすでに表れはじめていた墓域における集団表現(優位集団の出現・系列化)がより顕著になったと理解されるもの、すなわち墓域における様々な差異の表現(墓域を有するか否か、副葬品の量や質などの墓域構成における差異[溝口2000]のほか、より重要なものとして、前段階においては認められなかった、居住域における差異表現が出現する点が注目される。例えば、住居跡の規模や鉄器保有率、掘立柱建物の有無や規模などにおいて、居住集団間の優位－劣位の格差が表現され始めるのである。これは、中期末～後期初頭の画期を経て序列化の要素を新たに加えながら再編成された集団間関係が、安定し、既定の路線として肯定され、積極的に受容されていくようになったことにより、日常生活の場である居住域においてもこのような序列化が表されるようになったものと考えられる。優位集団への近接性をもとに、集団同士の序列化が積極的に進行し始めた様相と理解できよう。以上の様相から、この段階は首長制社会の初期段階と見なしておきたい。

最後に、居住域に現れた集団のいくつかの位相について、社会人類学、特にサーヴィスによる部族社会・首長制社会における集団概念を当ててみたい。まず、中期には集落内に複数存在する可能性が高いものの顕在化せず、後期になって居住集団として顕在化する「分子集団」であるが、この集団の特徴として次のような点が挙げられる。まず、それらはそれぞれ単独で集落を運営できる一方、複数集合して大規模な集落を作る場合もある。居住集団として顕在化する場合もあれば集落の中に埋没する場合もある。規模はバリエーションが豊富でありかつ可変的であり、特に中期末～後期初頭の画期には中期の複数の分子集団が集合して大きな一つの分子集団を作る一方、後期中葉以降はこれが解体して再び複数の分子集団として中・小規模集落を形成するようになるといった動きを示す[小澤2000a]。以上のような特徴のうち、これが本質的には居住集団であるという点と、アメーバのような規模の可変性と可合体・可分裂性は、これがより大きな集合体の下位分節であることを示す。部族・首長制社会におけるこのような集団として、リネージ(・リネージ分節)(的集団)が想定できよう。集落は居住集団としてのリネージ(群)に該当し、特に中期の拠点集落や後期の区画集・村落は居住集団としてのリネージの集合体と考えられよう。クラン(的集団)はこれらの集落群を横断して統合するソダリティであるから居住集団としては現れ得ない。中期の大規模な列状墓域の造墓主体としてクランが機能した可能性はあるが、考古資料からの検討は今後の課題であろう。後期の地域勢力の実態としては領域を持つ部族が想定され、その母胎として前～中期に平野単位の緩やかなまとまりが存在した可能性は否定しないが、明瞭な境界を持つようなものではない。なお、単位集団規模の居住集団存在するかどうかは、本稿で分析の対象とした資料群からは明らかにし得ない<sup>(30)</sup>と考える。

## おわりに

弥生時代早期～後期へと、通時的な集団関係変化の過程を、北部九州、特に博多湾沿岸地域における集落資料を主たる材料として分析してきた結果、これまでの弥生時代集団論とはかなり異なる結論を示すことになった。

本稿において展開した弥生時代集団論は、これまで弥生時代社会論を規定してきた「単位集団論」からの脱却と、E.サーヴィスによる新進化主義社会発展段階論のより正当な形での適用を意図した一つの試論である。社会集団論の展開においては、かつて単位集団論(におけるマルクス主義社会発展段階論)がそうであったように、考古学的資料のみから論を構成することは困難であり、隣接諸学、特に社会人類学における社会集団論の成果の導入は不可避である。それゆえに、文化人類学における諸理論の問題点が必然的に内包されることは言うまでもない。にもかかわらず、本稿においてあえて新進化主義社会発展段階論を前面に出して議論を進めたのは、これまでの弥生時代集団論にきわめて強い影響を与えてきたいわゆる「単位集団論」が、前提の部分において多くの未検証仮説に依拠しており、単位集団論が依拠したはずのマルクス主義的社会発展段階論についてもその正当な適用ができていないという基本的な問題点を指摘し、これをただすこと、また単位集団論に影響されたためにこれまで弥生集団論において正当な適用をされてこなかった新進化主義社会発展段階論を正当に適用することが、今後の弥生時代集団論がいずれに展開するにしろ、必要不可欠であるという認識に基づく。

本稿においてたどり着いた結論がこれまでの研究と比べて「より正しい」かどうかは分からないが、少なくとも単位集団を乗り越えるべきであること、また乗り越えた先に新たな弥生時代集団論の新たな発展があることは少なからず示すことができたかと思う。今後の弥生時代集団論が、単位集団論を乗り越えて広く展開していくことを期待したい特に、弥生時代において「国」「国家」「都市」「戦争」といった、すでに社会的に定義がなされている概念を扱うにあたっては、例えば本稿で試みたような、いうなれば時代背景をめぐる理論的整理を(自らの理論的立場を明らかにするための作業)を行うことが、その議論を意味あるものにするために極めて重要な手続きであるという認識が広く共有され、より生産的な議論へと結実していくことを強く期待するものである。

### 註

(1)——彼らは、第二次世界大戦前の世相の中で、日本古代史においてマルクス主義社会発展段階論を軸とした社会論を展開し、「日本歴史教程」[渡部ほか1936]を執筆したことでこう呼ばれた。原秀三郎によると執筆メンバーは大きく第3次グループまでが指摘されているが[原1972]、ここではこのうち1・2次グループを指す。その主要なメンバーとして渡部のほか早川二郎、伊豆公夫、三沢章(和島誠一)などがいた。

(2)——渡部らは、アジア的生産様式について、これを

被征服集団がその首長の統率下に征服集団に対して貢納するところの関係として把握し、それを貢納制と呼んだ。彼らにとって貢納制は、あくまで征服集団と被征服集団間に築かれた関係であって、これは社会を規定する本質的な生産様式ではなく、社会を規定する本質的な生産様式としては各集団内の生産様式を想定するという立場に立った。この結果、弥生時代社会は各集団内における生産関係＝原始共同的または農業共同的生产関係が支配的な生産関係であり、従ってこの段階は無階級社会である



いう理解が成立することとなった。

(3)——藤間は、弥生時代を通じて世帯共同体を単位とする私有財産の蓄積が進み、徐々に格差が顕在化するにつれて、内部に芽生えた反共同体的なものを抑圧する共同体的な強制力とそれを執行する族長が析出されると理解し、この段階では未だ集団内部に芽生えた格差は明確な階級制として発展しないと見た。しかし、一方では内部に芽生えつつある反共同体的な格差＝芽生え始めた階級制を根拠とするより組織された強制力が外部に向かって進展して、他集団に対する征服戦が展開される。この征服戦は「倭国大乱」として魏志倭人伝に記載される大動乱という形で現れ、この結果(総体的)奴隷制・これに基づく国家が成立したとする。前半部分の見解は渡部に全面的に従っているが、後半の貢納制の解釈部分を「諸形態」に基づき解釈し直したものと見られる。

(4)——世帯共同体とは「氏族構成内に分岐し、氏族構成を打ち破って」出現する、家父長的様相を内包した大家族のことを指すとされる[大塚 1981]。近藤氏自身は明記していないが、弥生時代中期以降は基礎社会単位として家父長的傾向を強める世帯共同体をもつ無階級社会の最終段階における農業共同体社会であって、社会内に矛盾の蓄積による階級形成への契機を含む段階と見ていうことになる。

(5)——この点は、おそらく「氏族」概念の混乱(田中良之によれば、戦前のマルクス主義社会論と戦後の人類学における「氏族」用語の用い方の違いに原因があるためという。田中により教示。)に原因があると考えられる。すなわち、部族概念と氏族概念の混同である。

(6)——各氏の論については拙稿[小澤 2008]を参照。

(7)——原・石母田らは、藤間理論に反論する形で塩沢君夫が提出した見解、すなわちアジア的生産様式(＝総体的奴隷制)は原始無階級社会と階級社会の間にある別個の独立した普遍的な社会体制であって、渡部の「貢納制」に特徴づけられると言う理解に触発され、これに反対する立場から総体的奴隷制概念の再検討を行った。原は、総体的奴隷制が原始共同社会段階における「人格的奴隷状態」であって奴隷制の範疇には含まれないとした[原 1969]。この結果、(総体的奴隷制の展開したとされる)古墳時代が原始共同体社会に位置づけられ、これより以前の弥生社会も無階級社会で、「未開の中位に位置する部族連合の一形態」と理解された[原 1984]。一方石母田は、独自の「首長制」概念(新進化主義の「首長制」概念とは異なる)を用いて古代国家成立過程について整理を行った。これによると、「首長制」は日本における

原始共同体の解体以後から封建制に至る時期の支配的生産関係であって、その本質は総体的奴隷制であるという。この「首長制」は、「原始共同体の生産関係の必然的發展」として成立し、①共同体の労働が首長に対する徭役労働に転化した段階、②社会的職務を執行し敵対利害を調整する機関としての国家権力の端緒(国造制)が成立した段階、③専制国家(律令制)が成立した段階」[岩永 2003,p.9]へと展開するとされ、従って国家前段階の階級社会としての首長制社会の成立は、「首長が支配者に、その生産関係が階級社会に、したがって共同体労働が首長に対する徭役労働に転化する」[石母田 1971,p.293]弥生時代末～古墳時代初頭とみなされ、弥生時代は無階級社会とされた。

(8)——正確に言えば古墳時代「前Ⅱ期」。この「前期」はいわゆる古墳時代前期・中期を一括しており、それを4小期に区分したうちの二番目が「前Ⅱ期」である。[近藤 1960]を参照。

(9)——近藤氏は「前方後円墳の時代」においてそれまで「共同体」と呼んでいた単位集団の集合について「集合体」と呼び変えている。これは、この論文においてそれまで「農業共同体」と呼んでいた単位集団の集合が、後述する論旨の転換によって弥生時代には出現しないものであることになったことによるものであると思われる。なお、農業共同体と世帯共同体、氏族共同体の関係については大塚実の整理[大塚 1981]に基本的に従うこととする。

(10)——そもそもこの観点は、都出比呂志により古墳時代初頭の畿内の北部九州に対する政治的優位性を説明する手段として提示されたものである[都出 1970]。すなわち、北部九州と比較して畿内では墓への副葬制度が発達しないが、これは共同体規制が世帯共同体(世帯複合体)の上に強く働いたため共同体成員の均質化が進行する一方で共同体規制を体現する首長権力が突出したためと理解するものである。これによれば、一見複雑な階層性が成立していたように見える北部九州よりも、そうではない畿内社会の方が階級社会の成立に適していたという理解が成り立つ[岩永 1992,p.116]。

(11)——都出氏は、単婚家族を基礎とする小世帯同士の結合度合いには様々な条件により強弱の違いがあるので、分散居住の形態をとり結合度合いの弱いものを世帯共同体概念の中にくることは適切でないとして、後にこうした結合体を世帯共同体とは区別して「世帯群」と呼んだ。また、世帯共同体という用語についてもマルクス主義においては農業共同体の基礎構成単位という限定

的な意味が与えられていることから、後に「世帯複合体」と呼び直した。

(12)——藤間、渡部・和島が使用した「世帯共同体」という概念の内容や氏族共同体からの成立過程・村落共同体への変化過程については未だ不十分な点が多くあるとし、この概念を使用することを避け、代わりに「親族共同体」概念を新設した。そして、従来の世帯共同体概念が氏族共同体の分節とされるのに対し、親族共同体を氏族共同体の解体により成立する同格の集団概念にとらえ、氏族共同体－親族共同体－村落共同体という基礎構成集団の変遷過程を描いた。しかし、この提案は広く受け入れられることはなかった。

(13)——赤松が提示したこのような氏族の定義は、日本古代史学界におけるマルクス主義的社会発展段階論において共有された。しかし、田中良之氏によればこのような氏族のありかたは「地域盤踞型氏族」とも呼ぶべきもので、首長制社会へと至る過程でクラン間の(擬制を含む)同族化が進行して、地域集団がひとつのクランで代表されるようになった状態を示すものと想定できるという[田中良2000]。部族社会における氏族概念については次註を参照。

(14)——E. サーヴィスは、社会構造における集団概念について、①比較的永続的な人々の集合としての同居家族ないし世帯、リネージ(氏族分節)村および地域バンド、②クラン(氏族)、秘密結社、クラブ等の横断的な分散したアソシエーションの二つに分類し、前者を居住の単位、後者を非居住の単位(ソダリティ)とした。ソダリティは前者のような居住の集団同士を結びつけ関連づける協同的機能や目的を持つ非居住集団であり、部族社会における氏族(クラン)は、居住の単位である部族を統合するようなソダリティであるという。

(15)——逆に、前期に地域横断型クランを想定するならば、前期から中期にかけて地縁的に集団の再編成が行われるという主張についても考慮することが可能になる。

(16)——単位集団論者により単位集団が存在する証拠とされた資料に対する反論としては、このほかに、近藤の用本山遺跡の解釈[近藤1983]に対する藤田憲司の批判[藤田1984]、田中義昭の三殿台遺跡の解釈[田中義1979]に対する後藤宗俊の反論[後藤1987]、伊藤郭・武井則道による大塚遺跡の解釈[伊藤・武井1976]に対する都出の批判[都出1989]などがある。

(17)——なお、この集落動態における画期の時期については、西日本全域で共通するものと考えている。

(18)——例外として福岡市有田遺跡群・太宰府市国分松本遺跡などがある。また、これは博多湾沿岸域における特徴的な動態であり、そのほかの北部九州地域や西日本地域では前期環濠が数度にわたり同じ集落に掘割され、長期にわたり環濠集落として機能している事例が多く見られる点に留意したい。

(19)——拠点集落に対する明確な定義が必要である。本稿では中期における拠点集落に対する定義を行う(後述)。前期の集落間関係における拠点集落の定義は、これに準じるものとしておく。

(20)——筑紫野市により調査された隈・西小田遺跡群の他、福岡県により調査された天神遺跡、平原遺跡、橋詰遺跡、池ノ上遺跡、福岡県・小郡市により調査された津古・空前遺跡、津古牟田遺跡を含む。

(21)——大規模な列状墓の他に区画墓と関連性のありそうな施設として、大型の棟持柱を持つ建物がある。北部九州における特徴的な建物で、しばしば床面積が100㎡を超えることから、超大型建物とも呼ばれるもので、吉武高木遺跡・佐賀県柚比本村遺跡などで立地における区画墓との関連性が指摘されている[渋谷1995・高倉1995]。また、拠点集落の候補とされる大型の集落に伴い、区画墓との共存性が見られる(区画墓のある集落に見られることが多い)。

(22)——以上より、筆者は中期における拠点集落の定義について、祖先祭祀を媒介とした集団関係における結節点としての機能を有するという点を第一義としたい。なお、生産の集中や流通の結節点などの機能は、集団関係における結節点として機能する結果としてもたらされるものと理解する。また、前期における拠点性については中期的集団関係が前期的集団関係を踏襲して成立していること(後述)をふまえ、やはり拠点集落が血縁関係を軸とした集団関係における結節点として機能しているであろう点を拠点性の定義としたい。そして、その候補を、環濠集落としておく。

(23)——この点から、この二例は祖先祭祀を介した集団結節機能が付加される途上にあって継続的な祖先祭祀が成立する前に造墓行為が中断された例であり、中期的集団関係成立時の「揺らぎ」的な現象と考える。また、青銅器(武器・鏡等)の墓への副葬例は福岡平野・早良平野ともに前期末～中期初頭に集中し、量的にも中期後半のいわゆる「王墓」を除けば前期末～中期初頭が突出して多い。これは、画期における拠点集落成立時の競争の様相を示すものと見られ、中期的集団関係形成初期の「揺らぎ」の傍証ともなる。

(24)——ただし、実際に集団同士の紐帯を構築するに当たって、母村－分村関係が影響を及ぼした可能性を完全に否定することはできない。ここでは、拠点－周辺集落関係を結ぶに当たっての第一義的な原理として、母村－分村関係を想定することができないと言うにとどめたい。

(25)——以上から、中期社会における集団間の血縁関係は前期末～中期初頭の画期において新たに形成されたものであることは理解できたであろう。このように、当初は血縁の関係を持たない(と考えられる)集団同士が新たに持った近接関係を軸として血縁関係を結ぶ場合、それは「擬制的」な関係になるのではないかという疑問があるかと思う。この点については岩永省三氏の整理を参考にされたい[岩永 2003]。本稿での事例について端的に説明すれば、近接集団同士が婚姻を通じた系譜の乗り換えなどにより新たに血縁関係を創出する行為が行われたと理解できる。このような行為が比較的容易に行われうる親族関係として、田中良之氏は双系の社会を想定する[田中良 2000]。

(26)——集落の中に単独で存在する溝に囲まれた小規模な建物は福岡市野方遺跡群(野方中原遺跡)、吉野ヶ里町松原遺跡などで類例があり、集落に一つ付属する特別な施設(宝物庫など)とも考えられる。

(27)——野方中原遺跡は国指定史跡になっているため、堅穴住居を完掘していない例が多く、住居の規模を把握できる例が少ないという点が影響している可能性はある。

(28)——若林邦彦氏は、畿内の弥生集落を分析する中でこの点について早くより指摘し、内部に単位集団(的な規模の小親族集団)を含みこむ「基礎集団」(住居 10～20 棟程度の規模をもつ)が弥生集落の基礎的な構成集団として一般的にみられること、またこれが複数近接して

居住することにより「複合型集落」が形成されることを指摘した[若林 2001・2003・2005・2008]。氏の指摘する基礎集団と本稿で指摘した中・後期の居住集団は、それ自体が単独で完結した集落を形成しうる点、複数近接して拠点集落を形成することがある点など共通性が高く、北部九州でも畿内でも弥生集落の基礎構造がよく類似していることを示すものとして大いに参考となる主張である。ただし若林氏は基礎集団の集団規模を規定しているが、本稿において指摘した居住集団はより変異幅の大きなものとみており、本稿でこの用語を使用するのは避けたい。また、本文中で指摘したとおり、筆者は拠点集落について明確な必然性がある形成されるものと考えており、この点においても若林氏とはやや異なる立場である。

(29)——ただし、北部九州の大規模な集落において、いわゆる同心円的切り合い関係にある住居が中期後半以降増加するという現象には注目したい。居住域の中においても長期間同一の場所に居住し続けることによって系譜の深さを主張するものであるとすれば、墓域における「系列」の顕在化と軌を一にした動きとも考えられる。しかし居住域におけるこのような動きは墓域における「系列」の顕在化よりはずっとマイナーな動きであることはいえよう。

(30)——もし単位集団規模の集団が存在するならば、リネージの下位分節であってその内容は複合家族(血縁的にごく近い関係にある数個の核家族群)と考えられよう。このような単位が集落において析出されない、つまり集団関係においてあまり重要な役割を果たさないと考えられる点が、部族紐帯を基礎とする集団関係により規定される社会の一つの特徴であり、その点からも弥生時代の集団関係の特質が理解できよう。

## 参考文献

- 赤松啓介 1937 「古代社会の形成と発展過程－播磨加古川流域の研究－」 経済評論 42 叢文閣  
 石母田正 1971 『日本の古代国家』 岩波書店  
 伊藤郭・武井則道 1976 「大塚遺跡発掘調査概報」 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編『調査研究収録』1 横浜市埋蔵文化財調査委員会  
 岩永省三 1991 「日本における階級社会形成に関する学説史的検討序説Ⅰ」『古文化談叢』24 九州古文化研究会  
 岩永省三 1992 「日本における階級社会形成に関する学説史的検討序説Ⅱ」『古文化談叢』27 九州古文化研究会  
 岩永省三 2003 「古墳時代親族構造論と古代国家形成過程」『九州大学総合研究博物館研究報告』1 九州大学総合博物館  
 大塚実 1981 「世帯共同体について」『考古学研究』27-4 考古学研究会  
 岡本三郎・飯田寛一 1947 「新たに発表されたマルクスの草稿について」『歴史学研究』129 歴史学研究会  
 小沢佳憲 1999 「玄界灘沿岸地域における中期から後期の集落動態」『第45回埋蔵文化財研究集会弥生時代の集落



- 
- －中期から後期を中心として－』 第45回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 小沢佳憲 2000a 「弥生集落の動態と画期－福岡県春日丘陵域を対象として－」『古文化談叢』44 九州古文化研究会
- 小沢佳憲 2000b 「集落動態からみた弥生時代前半期の社会－玄界灘沿岸域を対象として－」『古文化談叢』45 九州古文化研究会
- 小澤佳憲 2002 「弥生時代における地域集団の形成」『究班』Ⅱ 埋蔵文化財研究集会25周年記念論文編集委員会
- 小澤佳憲 2006a 「玄界灘沿岸地域の弥生時代前半期集落の様相－住居形態の変遷を中心に－」『弥生集落の成立と展開』第55回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 小澤佳憲 2006b 「北部九州の高地性集落－集落動態からの検討－」『古代文化』58-2 古代学協会
- 小澤佳憲 2008 「集落と集団①－北部九州－」『弥生時代の考古学』8 同成社
- 鏡山猛 1941 「日本原始聚落の研究－福岡市比恵遺蹟の紹介－」『歴史』16-2 歴史文化研究会
- 鏡山猛 1956 「環溝住居址小論」一 『史淵』67 九州大学文学部
- 鏡山猛 1957a 「環溝住居址小論」二 『史淵』71 九州大学文学部
- 鏡山猛 1957b 「環溝住居址小論」三 『史淵』74 九州大学文学部
- 鏡山猛 1959 「環溝住居址小論」四 『史淵』78 九州大学文学部
- 片岡宏二編 1988 『みくに野第二土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告－8－ 三国の鼻遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第43集 小郡市教育委員会
- 後藤宗俊 1987 「弥生時代のイエについての覚書－集落跡からのアプローチの試みとして－」『東アジアの考古と歴史(岡崎敬先生退官記念論集)』中 同朋舎
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 考古学研究会
- 近藤義郎 1960 「地域集団としての月の輪地域の成立と発展」共同研究「月の輪古墳」編集部編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 近藤義郎 1962 「弥生文化論」家永三郎ほか編『岩波講座日本歴史』1(原始および古代1) 岩波書店
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店
- 篠田謙一・國貞隆弘 1993 「隈・西小田地区遺跡群出土人骨のDNA」草場啓一編『隈・西小田地区遺跡群－隈・西小田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集 筑紫野市教育委員会
- 渋谷格 1995 「佐賀県柚比本村遺跡」『九州考古学』61 九州考古学会
- 下條信行 1986 「北部九州の水稲耕作」近藤義郎ほか編『岩波講座日本考古学』5(文化と地域性) 岩波書店
- 佐々木隆彦編 1976 「大南遺跡調査概報－福岡県春日市小倉大南所在の遺跡－」春日市文化財調査報告書第4集 春日市教育委員会
- 新宅信久 1996 「パズルの一片－弥生時代早期の集落の様相－」『福岡考古』13 福岡考古懇話会
- 新宅信久編 2002 『江辻遺跡第5地点－弥生時代早・前期墓地群の調査－』粕屋町文化財調査報告第19集 粕屋町教育委員会
- 杉原敏之編 1999 『以来尺遺跡Ⅲ－一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集－』福岡県教育委員会
- 高倉洋彰 1973 「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20-2 考古学研究会
- 高倉洋彰 1975 「弥生時代の集団組成」福岡考古学研究会編『九州考古学の諸問題』東出版
- 高倉洋彰 1995 『金印国家群の時代－東アジア世界と弥生社会－』青木書店
- 高橋学 1995 「平野の微地形変化と開発」吉野正敏・安田喜憲編『講座文明と環境』6(歴史と気候) 朝倉書店
- 武末純一 1990 「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 田崎博之 1989a 「土器と集団(Ⅰ)」『九州文化史研究所紀要』33 九州文化史研究所
- 田崎博之 1989b 「土器と集団(Ⅱ)」『九州文化史研究所紀要』34 九州文化史研究所
- 田崎博之 1990 「土器と集団(Ⅲ)」『九州文化史研究所紀要』35 九州文化史研究所
- 田中良之 2000 「墓地から見た親族・家族」都出比呂志・佐原真編『古代史の論点』2(女と男、家と村) 小学館
- 田中義昭 1979 「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』25-4 考古学研究会
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権－階級形成の日本的特質－」歴史学研究会／日本史研究会編『講座日本史』1(古代国家) 東京大学出版会
-



- 
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」 歴史学研究会／日本史研究会編『講座日本歴史』1（原始・古代1） 東京大学出版会
- 都出比呂志 1989 『日本農耕文化の生成過程』 岩波書店
- 藤間生大 1946 『日本古代国家』 伊藤書店
- 藤間生大 1951 『日本民族の形成－東亜諸民族との連関において－』 岩波書店
- 中島達也・平川祐介編 1987 『宝満川流域下水道事業関係埋蔵文化財調査報告－三国の鼻遺跡Ⅳ・津古脇田遺跡福岡県小郡市津古所在遺跡の調査報告－』 小郡市文化財調査報告書第39集 小郡市教育委員会
- 中牟田賢治編 1978 『千塔山遺跡－弥生環溝集落・古墳・中世墳墓の調査－』 基山町文化財調査報告書第3集 基山町遺跡発掘調査団
- 原秀三郎 1969 「アジアの生産様式論批判序説」『歴史学評論』228 歴史科学協議会
- 原秀三郎 1972 「日本における科学的原始・古代史研究の成立と展開」 歴史科学協議会編『歴史学大系』1（日本原始共産制社会と国家の発展） 校倉書房
- 原秀三郎 1984 「日本列島の未開と文明」 歴史学研究会／日本史研究会編『講座日本歴史』1（原始・古代1） 東京大学出版会
- 藤田憲司 1984 「単位集団の居住領域－集落研究の基礎作業として－」『考古学研究』31-2 考古学研究会
- 水島稔夫編 1990 『綾羅木川下流域の地域開発史（山口県下関市大字綾羅木・延行・有富地内・延行条里遺跡ほか発掘調査報告書）』 下関市教育委員会
- 溝口孝司 1995 「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究－いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討－」『古文化談叢』34 九州古文化研究会
- 溝口孝司 1997 「二列埋葬墓地の終焉－弥生時代中期（弥生Ⅲ期）北部九州における墓地空間構成原理の変容の社会考古学的研究－」『古文化談叢』38 九州古文化研究会
- 溝口孝司 1998 「カメ棺墓の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル－平成10年度福岡市博物館特別企画展－』 福岡市博物館
- 溝口孝司 2000 「古墳時代開始期の理解をめぐる問題点－弥生墓制研究史の視点から－」『古墳時代像を見なおす－成立過程と社会変革－』 青木書店
- 溝口孝司 2001 「弥生時代の社会」 高橋龍三郎編『現代の考古学』6（村落と社会の考古学） 朝倉書店
- 溝口孝司 2005 「西からの視点」『シンポジウム記録』5（畿内弥生社会の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる問題） 考古学研究会
- 溝口孝司 2008 「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格－浦江遺跡第5次調査区画墓の意義を中心に－」『九州大学考古学研究室50周年記念論文集』（上） 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会
- 山村信榮編 1998 『佐野地区遺跡群Ⅷ』 太宰府市の文化財第39集 太宰府市教育委員会
- 吉留秀敏 1994a 「弥生時代環濠集落の変遷」 城戸康利・前田達男・吉留秀敏編『牟田裕二君追悼論集』 牟田裕二君追悼論集刊行会
- 吉留秀敏 1994b 「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』33 九州古文化研究会
- 和島誠一 1948 「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』 学生社
- 渡部義通 1936 『日本古代社会』 唯物論全書 三笠書房
- 渡部義通・三沢章・伊豆公夫・早川二郎 1936 『日本歴史教程』 第一冊（原始社会の崩壊まで） 白揚社
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価－大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に－」『日本考古学』12 日本考古学協会
- 若林邦彦 2003 「基礎集団・遺跡群・弥生地域社会」『考古学に学ぶ』2（同志社考古学シリーズⅧ） 同志社考古学シリーズ刊行会
- 若林邦彦 2005 「集落からみた「畿内」社会」『シンポジウム記録』5（畿内弥生社会の再検討・「雄略朝」期と吉備地域・古代山陽道をめぐる問題） 考古学研究会
- 若林邦彦 2008 「集落と集団2－近畿－」『弥生時代の考古学』8（集落からよむ弥生社会） 同成社
- E サービス（Service, Elman Rogers） 1971 Primitive social organization （松園万亀雄訳 1979 『未開の社会組織－進化論的考察－』 弘文堂）
- J Friedman / M. J. Rowlands 1977 Notes towards an epigenetic model of the evolution of 'civilization'. The Evolution of Social systems. Gerald Duckworth and Co Ltd.
-

---

(福岡県教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(2008年10月31日受理, 2008年12月5日審査終了)

---

## **Yayoi Period Settlements and Society in Northern Kyushu**

OZAWA Yoshinori

Theories on the structure of society in the Yayoi period have been largely prescribed by the interpretations of academic societies on ancient Japanese history inspired by Yoshimichi Watanabe's adoption of Marxist theory on the stages of social development. In contrast, in this paper the author's aim is to introduce a new theory on the structure of Yayoi society based on the neo-evolutionary view of the stages of social development.

A study of settlement dynamics in northern Kyushu shows that huge changes took place from the end of Early Yayoi through to the beginning of Middle Yayoi, from the end of Middle Yayoi through the beginning of Late Yayoi, and in the middle of Late Yayoi. A comparison of social structure around these periods of transition reveals that egalitarian tribal societies with moated settlements that appeared one after another as group focal points in Early Yayoi established a new group relationship in Middle Yayoi based on the group relationship from the previous period of other settlements that had moved to the hills en masse. These societies once more introduced ancestor worship at places such as demarcated graves, long rows of graves and large buildings as a means of reinforcing this new group relationship. Because this involved property, unlike the previous period a base settlement was established, and as a result a potentially dominant group developed. The change that occurred at the end of Middle Yayoi through to the beginning of Late Yayoi was the emergence of the potential dominance that had existed in Middle Yayoi. This was accompanied by the phenomenon of housing, the emergence of molecular groups that had been hidden within a settlement, and the manifestation of actions clarifying the boundaries of each phase. This can be seen as defining the range of one's group accompanying the social manifestation of the existence of a dominant group and growth of the size of the group. This was later followed by the incorporation of a subordinate group under a dominant group accompanying the explicit dominant-subordinate relationship between groups that developed throughout Late Yayoi.

When the above changes in social structure are taken into consideration, it is possible to characterize society in Early to Middle Yayoi as a tribal society and Late Yayoi as a chiefdom society.

Key word : Marxist theory on the stages of social development, neo-evolutionary view of the stages of social development, unit group theory dwelling group, divided village / villages community, divided molecule, hierarchizing, affiliation

---